

---

# ソングライター ホシオカ 龍馬編

武上 湊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ソングライター ホシオカ 龍馬編

### 【Nコード】

N7432I

### 【作者名】

武上 溪

### 【あらすじ】

戊辰戦争を阻止する為に、暗殺寸前の坂本龍馬をまたもや遭難したアメンティティが2009年に飛ばした！。…星岡の迷惑も顧みず…。龍馬を慶應3年に、戻さなければならなくなった星岡と理香子に、再び災難が降りかかる。果たして戊辰戦争は起こらないのか？。起こらなかったとしたら、日本史はどうなる？。坂本龍馬が生き延びた世界はいつたい？どうなる！全21話大河ドラマがはじまる前に連載開始！

## ―前書き

献辞

ウメさんに

坂本龍馬と巡り合わせて頂いた  
故司馬遼太郎さんに敬意を込めて

温かくもてなして下さい  
酒屋の皆さんに  
感謝と

その郷土愛に

坂本龍馬のみならず

幕末の混乱の中で

命を落とした

全ての若者達に

彼らの築こうとした世界の未来に生きる者として

本作を捧げる

ソングライターホシオカ

く龍馬編

## ―前書き

最初に、本作は文献から導き出される史実とは、かけ離れた物語で有る事をご認識下さい。

また、時代考証に関して厳密に慶應3年を再現しているものではありません。京の町並みについては、「改正 京町御絵図細見大成 洛中洛外町々小名 全」竹原好兵衛版のコピーを元に、作者が想像した物で正確なものでは有りません。

また、土佐弁に関しても ㄥぜよ ㄥきに ㄥちよる を作者が独自に配したもので現実の土佐弁では有りません。

さらに、作中でタイムスリップが行われますが、これは多次元宇宙論を採用していません。過去が改変されれば、未来も因果関係に従って改変される旧来のタイムトラベル小説の形式を採っています。1話は、ソングライターホシオカ アメンティティ ホティオティ編の続きとなっています。よろしければ、そちらの方を御一読下さい。

では。

救出ポイントに向かっていている緊急脱出用ポッド内から、物語はスタートします…

2009年4月

武上溪



## ―第1話再遭難

### ―第1話 再遭難

緊急脱出用ポッドは、順調にラグランジュポイントに向かっているように見えた。

アメンティティの腕時計型モニターは沈黙している。

ポッドの不具合は解決不可能な問題だ。設置に困難を極めるのに加えて、メンテナンスに行くのが難しい。特に2つのコロニーが戦争状態ではなおさらだ。

あと20分でラグランジュポイントに入れば、すでに遭難信号を受信しているはずの救助隊が居るはずだ。

しかし。腕時計型モニターは、聞きたくない警告音を発した。

「どうしたコンピューター？」

―弾道計算にミステイクがありました。徐々に、予定ポイントへの軌道がズレ始めています―

「原因は？」

―重量と思われます。わずかに、重量係数が少なく見積もられていました―

「お腹の子か？」

「その可能性はあります。重量計算がデフォルトで…外形からの推測モードになってます。変更すべきでした」

「対策は？」

「重量が減れば、軌道は戻ります」

「分かった。時空間スパイラルに俺が飛び出す」

ホテイオティがアメンティティの手をつかんだ。

「そんな！。危険すぎる！」

アメンティティは、安心させる為に笑って見せた。

「時空間スパイラルから地球ナラクに戻れば、距離的移动はゼロになる。

それなら空気は必要ない。ポッドの外は有害な宇宙線と真空の世界だ」

「でも。いきなり出たら、行き先の時代を選んでる時間はないわ？」

「だが。そこには必ず緊急脱出用ポッドが有る。戻ってくるよ」

「アメン…」

ホテイオティは泣き顔でアメンティティを見つめた。

「コンピューター。時空間スパイラル突入のカウントダウン開始」

「これ以上の軌道のズレは危険です…3カウントで突入します」

ホテイオティがつかんでいた手が、白く抜けて消えた…。

「アメン…！」

ホテイオティは夫が居た場所に向かって叫んだ。

背後には。軌道から外れて行くポッドを心配して、救助隊の巡視船が小さく見え始めていた…。

星岡幸広は理香子と京都駅前で、京都タワーを見上げていた。誕生日プレゼントは何が良い？と聞かれて…理香子は、京都に旅行したいと言ったのだ。

「京都なんて…小学校の修学旅行以来だな。まだ有んのかな？清水寺とか二条城とかさ」

理香子は思わず、新品の茶色いブーツで躓いて（つまづいて）しまった。

「…無くなってどうするのよ。デイズニールンドのアトラクションじゃないんだから」

あきれ顔の理香子を、イタズラっぽい顔の星岡が覗き込んでいた。

冬の冷たい雨が降っている。

理香子は傘ではなく、自転車用の雨ガッパを星岡の分も用意して着せていた。

「良いけどさ。こんなの着てるって事は、バスとかタクシーには乗らないって事か？」

「私の専門は何だった？。まだ馬と駕籠と船の時代よ」  
「幕末か…」

そうつぶやく星岡の前を、理香子は駅前から東に向かって歩き始めた。

「オイオイどこ行くんだよ。北に行くんじゃないのか？」

理香子は、ドンドン東に向かって信号を渡ってゆく。もはや…京都のかけらもない普通の市街地だ。

やがて、用水路に架かる橋の上に出た。

「この川の名前は何ですか？。星岡君？」

星岡は川を見た。どう見ても生活排水が流れているドブ川にしか見

えなかった。ただ、観光地だけにゴミと臭いはない。けっこう流れが有る。

「京都放水路とかじゃないのか？」

理香子は橋の欄干から川を見つめて言った。

「これはね。高瀬川よ」

「高瀬川って誰だっけ？」

「すみのくろくろじゅうい角倉了以」

「あゝそうそう。でも高瀬川って運河だろ？。水深はないし…幅だつて狭すぎるんじゃないか？」

「大正時代に埋められたの。船による水運の時代は終わったのね。写真が残ってる。両側に高く盛り上がった土手に並木が植えられて…その間に幅広い運河が有った。でもここを、材木を積んだり荷物を満載した高瀬船…そして、その積荷に紛れて坂本龍馬や海援隊士がこの場所を上り下りしてた」

「そうか！。歩いたんじゃないく、運搬船を使ったのか。それなら、自由に京都に出入り出来るわけだ」

「海援隊の拠点は材木屋だった。その材木屋は、木材の独占輸送権を持ってて、運送業もしてた。さて…」

理香子は、高瀬川から視線を星岡に向けた。

「…高瀬川沿いに、三条の酢屋海援隊本部まで歩くわよ！」  
理香子は楽しそうだった。

星岡は、まったく知らない幕末の姿を高瀬川に重ね合わせて見ている。京都は用水路すら遺跡なのだと…。

高瀬川沿いは住宅地で、川に沿って生活道路が北に向かって貫いている。

親子連れが前を歩いてゆく。男の子が道端の祠ひこに駆け寄って手を合わせる。母親もその後ろで同じように手を合わせた。そして親子は自宅の中に入ってゆく。

「お地蔵さんか…って事は、ここで誰かが行き倒れたか斬られたかしたんだろうな」

星岡はフトある想いが頭をよぎった。

「幕末って暗い時代だよな。新選組とか京都見廻隊とかが人斬ってたんだろ？。何で理香子は、この時代なんだ？」

「そうね。幕府も藩も経済破綻寸前で…外国が開国しろと現れた。外国と渡り合う力は、軍事的にも経済的にも無かった。間違ひなく内乱が起こって…外国がそこにツケ込んで、日本はめっちゃくちゃになるはずだった。それが、戊辰戦争の短期間の戦争で終わった。実はね。ひいおじいちゃんが戊辰戦争で死んでるの。伏見奉行所に出張してて…。中学生の時に、その戊辰戦争の事を書いた本を読んだ。そこに、こう書いて有った。坂本龍馬が生きていれば、戊辰戦争は起こらなかつただろう…って。どうしてかは書いて無かった。それを知りたくて、幕末の事を調べ始めたのがキツカケね」

「坂本龍馬って、戦争を止められるような力が有ったのか？。腕は北辰一刀流免許皆伝だけ…。でっどうしてだか分かったのか？」  
理香子は浮かぬ顔になった。

「仮説のみね。文献からは、坂本龍馬がした仕事は出てこない。出てくるのは、龍馬のプライベートな部分ばかり。って言うより、プライベート以外の文献が、綺麗に残ってない感じ」

「誰かが、世の中から消し去ったって意味か？」

「有って消えたと言う証拠が無いから…それは無いって事になる。」

幕末の文献は出尽くして、もう出ないだろうと言われている。海援隊の誰かが、何か書き残してくれてれば、何か有るはずなんだけどね。元気の無い話しに、星岡は突っかかってみた。

「じゃあ…理香子の仮説を聞かせてくれよ」

「…仮説ね。ただの夢物語ね」

「トロイの木馬は、夢物語だったんだぜ？」

2人は四糸を越えた。

「…戊辰戦争を止めるのに、最も簡単な方法は、將軍慶喜が大阪か

ら居なくなる事。将軍が居なければ、幕軍は戦闘を行う事が出来ない」

「つまり…坂本龍馬が生きていたら、将軍慶喜は、史実よりも早いタイミングで大阪から出られた…と？」

「…そう。将軍慶喜が大阪から退去したのは、劣勢で逃げたと言われているけどそうじゃない。大阪湾にイギリス艦隊が居たから、大阪から出られなかったと言うのが私の説」

「イギリス艦隊が退路をふさいだって事か？」  
理香子はうなずいた。

「イギリス公使館はダブルスタンダードだった。無血革命と武力倒幕の両方に担当者が居て支援してた。そして、それがどっちになるうが、イギリス公使館としては構わなかった。早くて上手く行く方ならね」

「昔も今も変わらぬイギリス外交か…。で、そのふさがれた退路をどうやって開いたんだ？」

「アメリカの軍艦が慶喜をいったん収容して…翌日幕府の艦に移って江戸に戻った。龍馬なら、展開を予測して戊辰戦争が始まる前にその手順を整える事が出来たと思う」

「つまり。アメリカ公使とパイプが有ったって事か？」

「そう。それを裏付ける文献があればね。でも、龍馬との関係を示す文書は一切ない。綺麗さっぱり。龍馬はね、議会の構想を西郷に示してる。議会は2つに分かれてて、1つには庶民も参加させるとある。これは当時のイギリスの考え方じゃなくて、アメリカ議会の仕組みなの。イギリス公使館のアーネスト サトウは日記に書いてる。庶民を議会に参加させるのは危険すぎるって」

星岡は高瀬川を見た。

「アメリカと龍馬の関係を示す文書が無い理由は？」

「歴史は勝者の手で作られる。イギリスは幕末維新の勝者だった。この勝利が…坂本龍馬が消えた事で得られたとしたら？」

星岡は高瀬川から理香子の顔に視線を移した。

「龍馬の功績が文書として有れば…誰にでも犯人は判つてしまう」  
「…妄想ね。京都見廻隊が不運にも龍馬の頭を割った…と言う方が健康的かもしれない」

「そうじゃないさ。理香子は研究者だろ？。研究者は真実を追求するのが仕事だ。政治的な思惑なんて関係ない。真実が埋められてるなら、それを見つけて発掘するのをやめるべきじゃない。出来ないなら、歴史から一切手を引くべきだ。違うか？」

「……。痛いトコ突かれちゃった。わかってる。わかってるけど、心が折れそうになる」

「心はさ。何度折れたつて、元に戻る。その気になれば。折れる時には、無理せず折つといた方がいい」

「ユキヒ口過激だよ。でも、そう思うのも1つの手段かもね」

理香子は苦笑して、星岡を見た。その星岡の顔の向こうに「酢屋」の看板が見えた。

「…着いたよ。酢屋海援隊京都本部。今も材木業だけど、この場所は創作木工芸の店になってるの。昔は店の前は丸太置き場で、高瀬川からの船着き場があった。舟入りつて名前だね。想像も出来ないね…その向こうは彦根藩邸が立ってた…」

2人は高瀬川を渡つて、龍馬通りに入つて行った。

次話！

## 1 第2話 酢屋

アメンティティは、慶應3年の京都酢屋の舟入り（舟着き場）に落下した。そこは新選組と京都見廻隊が不審者を斬り刻んでいた時代。果たしてアメンティティの運命は？。



## Ⅰ 第2話 酢屋

### Ⅰ 第2話 酢屋

アメンティティは、時空間スパイラルで行き先を選んでいる時間は無かった。リストの一番目を、見もせずを選択した。ポッドから出てしまっている以上、即死を免れる<sup>まぬが</sup>だけで精一杯だ。

どこかに出た。

と思った瞬間、下は水面だった。

水しぶきを上げながら、アメンティティは水中に落ちた。

もがきながら、水面に浮き上がる。

石垣で組んだ岸が見える。水面からさほど高くない。石垣にたどり着いて、必死で岸に這<sup>は</sup>い上がった。

まさか水中に落ちるとは思わないので、多少水を飲んでしまった。

免疫のない病気が発症する前に、ここから脱出しなければ…。

「どこだ。ここは？」

損傷防止の為に、腕時計型コンピューターは、防御モードになっている。20分程度操作できない。

夜だが月明かりで、周囲の様子は判る。巨大な丸太が間隔を開けて、積み重ねられている。電灯はない。

後ろを振り返ると、落ちたのは船着き場のようだった。口の中は塩辛いので、海ではない。内陸部の運河だろう。対岸にも同じよ

うに丸太が並べられている。その向こうは、木造の大きな建物が塀へいに囲まれて建っている。

前に向き直ると、丸太の向こうに2階建ての民家が見えた。2階は格子窓になっていて、その中で蝋燭ろうそくの明かりが動いた。

その明かりが、1階の引き戸が開いて出てきた。燭台しょくだいに蝋燭を立てた男が見える。ちぢれた頭髪を後ろで縛り、着物を着ている。腰には長い日本刀：身長は160cm有るか無いかくらい。目は細く、太い眉毛。唇は厚く、鼻から下が長く、細い顎アゴ。額ひたいも広い。アメンティティは、燭台の明かりに照らされた。全身を水面に叩きつけられた痛みが拡がり始めている。逃げて無駄な事をアメンティティは悟った。

「おんしゃあゝ水びたしじゃな〜」

男はそう言つて、大きな声で笑つた。人懐っこい（ひとなつっこい）顔につられて、アメンティティも笑つた。

「飲みすぎたか？。中で着替えんと、風邪をひく」

男は、アメンティティの腕を持って、持ち上げた。怪力だ。トンと立たされてしまった。

「歩けるか？」

瞬間的とは言え、真空中に放り出された。体中が痛む。

男は何も言わずアメンティティを背負つた。そのまま、出てきた家の中に入ってゆく。階段を上がり、格子窓の2階で板の間に寝かされた。

「わしゃ〜才谷梅太郎じゃ。おんしゃあ何と言つ？」

「アメンティティ アーメンだ」

「あめんさんか。国はどこじゃ？」

「月の裏側のコロニーだ」

才谷は冗談を言い合っている顔になった。

「ほう…。月からか…。だから、上から落ちて来たんじゃない？。しかし、その名はまずいぜよ。雨谷あめたにたろつ太郎と名乗れ。さもないと、幕府

の連中に斬られるぞ」

アメンティティは自分の危険度を知った。

「幕府。時代は江戸か…。才谷さん。今日は何年の何月何日です？」

「11月6日じゃ」

「何年の？」

「慶應3年じゃ」

アメンティティは、腕のコンピューターが復帰しているのを確認して、年号を告げた。才谷はその様子を興味津々（きょうみしんしん）で見ている。コンピューターが音声で返答した。

「鷲尾山。もしくは高台寺。開山堂真北の鷲が彫刻された石塔―才谷が身を乗り出して来た。

「しゃべるか？。その腕の鏡は？。エゲレス製じゃろうな？」

もはや無邪気なこの男を利用するしかない…とアメンティティは覚悟した。

「才谷さん。1秒でも早く、私は戻らなければなりません。隠し事をしていない時間はないのです。力を貸して下さい」

才谷は一瞬当惑した顔になったが、すぐに笑顔に変わった。

「心配ないきに。何をすれば良い？」

才谷の本心はわからない。自分を信用しているとは思えない。しかし、言ってみるしかない。

「高台寺。開山堂真北の石塔から、元いた場所に帰れます。そこにたどり着きたいんです。斬られずに」

「高台寺は東山じゃ。行くには半刻もかからんきに。案内してやるう。しかし、体が動かんじやろう？。焦らず体を治した方がいいぜよ。まず、濡れたその異人服を脱げ」

才谷は珍しそうに、学生服のボタンを外し始めた。

「エゲレスやメリケンの着物に似ちよるが…ちよつと違つもの」

アメンティティは才谷に手伝ってもらって、着物に着替えた。

「とりあえず。この家の者には、うちの新しい隊士と言う事にしち

よく

「隊士？」

「海援隊じゃ。わしや隊長じゃ。他の者は大阪や長崎に出払っちよるきにおらん」

「なぜ。そこまでしてくれるんです？。私の言った事は、すぐに信じてもらえてるとは…正直思えません」

才谷は、ここでまた豪快に笑った。

「みんな色々ある。そのまま言えん事も有るきに。ただ雨谷さんがわしをはめられるとは思えんきに。おんしゃあ、嘘を言えんお人じや。嘘つきなら、月から来たとは言わんぜよ。…それに。わしの田舎では、水に落ちた者はとことん助けるのが習わしじゃき。そんな者は幸運も一緒に持つてくるちゅーてな。わしらは、今何が欲しいと言つて、幸運が欲しい。のるかそるか<sup>はくち</sup>の博打を打つちよるきにの」

才谷の後ろの格子窓が白々（しらじら）と明けてきた。  
アメンティティは、海援隊と隊長と言うキーワードから、ある人物を思い出していた。その人物は、9日後の慶應3年11月15日に暗殺されているのだ。

次話！

― 第3話 久屋大通り公園

いつものように、星岡の路上ライブには、妙なギャラリイがやってきた。彼が運んで来たのは、まさにはた迷惑な慶應3年からのアメンティティのトラブルだった！。ホームレスの段ボール小屋から出て来た男とは？



### Ⅰ 第3話 久屋大通り公園

#### Ⅰ 第3話 久屋大通り公園

誕生日プレゼントの京都旅行の次の週の日曜。

星岡はロサンゼルス広場で路上ライブをやっていた。

目の前には、ホームレスのオッサンが1人、早く歌い終われと言わんばかりに立っていた。

この手のギャラリィに星岡が動じる事はない。

「…んでは、最後の曲です。クライムスクライシスと言う、携帯小説に共感して作った曲です。聞いて下さい。

知恵をくれ。

言葉が何の役に立つ

レノンが撃たれてからも

世界は戦場のままで

抗議の列は長くなるけれど

世論は変わってゆくものだと

チエイニーは言い放つ

悲劇はいつも弱い者達の

せめぎ合いの間から

さらに弱い者達の

上に降り注ぐ

やめてくれと叫ぶしか  
知恵のない 僕らに  
誰か 誰か知恵をくれ  
ほんのちよっとした知恵を

正義が何の役に立つ  
いつも開戦の口実で  
裏切り者と罵られ  
志願の列は長くなるけれど  
本当の敵はここに  
居ないのだと  
若者は塹壕に朽ちてゆく

悲劇はいつも 弱い者達の  
せめぎ合いの間から  
さらに弱い者達の  
上に降り注ぐ

やめてくれと叫ぶしか  
知恵のない 僕らに  
誰か 誰か 知恵をくれ  
ほんのちよっとした知恵を

誰か 誰か知恵をくれ  
ほんのちよつとした知恵を

ホームレスのオッサンは急かすように、ぞんざいに拍手した。

「…いつになく、激しい暖かい拍手をありがとうございます。また来週、この場所でお会いしましょう。星岡幸広でした」

星岡がギターを下ろす前に、オッサンは近づいてきた。

「終わったか？。終わったんだろ？」

えらくせつかちだ。

「はい。何か？」

「俺ん所に居る梅太郎って奴が、ホシオカ ユキヒロつてのに会いたがってる。同じ名前だから、お前かもしれん。会ってくれるか？」

「はあ…。良いですけど。どんな理由で？」

「友達を助けるのに、ホシオカユキヒロの力が要るんだと。アメンテイテイとか言う名前…多分エジプト人だな」

「アメンテイテイ？。…何があつたんだ？」

星岡は、慌ててギターをケースに入れると、周りの物をザックに詰め込んだ。その様子にオッサンが言った。

「アメンテイテイを知ってるのか？」

「知ってるも何も、奥さんが妊娠中の旦那さんです。トラブルなら大変だ。行きましょう」

星岡は歩き出した。

「そつちじゃねえよ」

オッサンは、星岡を引き留めて、北にあるホームレスの段ボール小屋に案内した。

ロサンゼルス広場の北側。道を挟んでここも公園になっている。中央に歩道があり、両側が林になっている。その林の中に、ビッシリと段ボール小屋が建ち並んでいた。このホームレスは凄い。犬まで飼っていて身なりも小綺麗な。公園の水道で洗濯された、洗濯物が干してある中を潜って、中程の段ボール小屋に案内された。

オッサンが入り口から声を掛けた。

「オーイ梅太郎っ！。ホシオカさんを連れて来たぞっ」  
中からゴソゴソつと音がして、人が出てきた。

ちぢれた天然バーマの頭髮は、ボニーテールにして縛ってあった。目は細く太い眉。唇は厚く、鼻から下が長い。顎は細く、額は広い。身長は160cm有るか無しか。上はフリースで、下は腰履きのジーンズに白のスニーカーを履いている。  
人懐っこい目が星岡を捉えた。

「どうも。オカ梅太郎じゃ。ホシオカさんか？」

「そうです。アメンティティに何が？」

「まあ座つちよくれ」

段ボール小屋の前に、立派なディレクターズチェアが3脚あった。オッサンも交えて、梅太郎は話し始めた。

「アメンティティさんは、脱出ポッドに不具合があつて再び遭難しました。奥さんは、おそらく救助隊に救助されて無事だと言つちよりました」

「今どこに？」

「京師じゃ」

「キョウウシ？…京都？。分かった。すぐ行く」

立ち上がりかけた星岡を、梅太郎は押し留めた。

「京は京じゃが、慶應3年の京ぜよ」

「…何だつて？。それはいつだ？」

「今から、だいたい142年前じゃ」

星岡はアメンティティなら有り得ると思つて、気が重くなった。

「よし。落ち着いて聞くぞ…。どうして、そうなるんだ？」

梅太郎はアメンティティが舟入りに落ちて来た所から語った。

「…で。なんでアメンティティが残つて、あんたがここでホームレスやつてるんだ？」

「わしや暗殺されるとアメンティティが言うきに。わしが死ぬと幕府と薩摩長州の間で戦が起こつてしまふ。生きていれば止められると。殺される前に、こつちに跳ぼうと言う事になつた」

梅太郎は、しばつた髪を右手でゴソゴソとほぐした。

「アメンさんの水晶は、1人しか跳ばせんらしい。11月12日に高台寺からアメンティティさんを残して、こつちに半年前に跳んできた。色々あつて、宮本さんに助けられ、ここでホームレスをやつちよります」

オツサンは宮本さんと言うらしい。宮本は言つた。

「梅太郎はな。坂本龍馬だ。間違いない」

星岡は、理香子の戊辰戦争にまつわる話しを思い出した。

坂本龍馬が生きていたら、戊辰戦争はなかつたと言う話を…。しかし、アメンティティの名前がなければ、無差別級の妄想狂に捕まつたと思ふ所だつた。

「で？。アメンティティは俺に会えと？」

「そつじゃ…」

梅太郎は言つた。

「…ホシオカユキヒロに会つて、ホテイオティと連絡を取つてくれと。別の水晶を持って、わしが戻り。その水晶でアメンティティさんをここに戻す。それが段取りじゃ」  
「どうもこうもない。」

「分かつた。やろつ」

幕末の京都は、新選組と京都見廻隊が平然と人を斬つていた時代だ。素性が判らないアメンティティが、幕府の役人に捕まりでもしたら…命はない。

たがその前に、星岡は理香子の事を思い出した。  
専門家が必要だ。

彼女のヒーローでもある。会わせてやりたいと思った。

星岡は携帯を開いて、理香子をコールした。

次話！

#### ― 第4話 国家機密

坂本龍馬は日本政府の国家機密だった。星岡からの電話を傍受した公安久利坂が理香子に張り付くが……。事態は意外な方向へと暴走し始める！。

## ―第4話 国家機密

### ―第4話 国家機密

理香子は、徳川美術館の学芸員だ。  
星岡からの電話を終えて、携帯を顔から離すと、館長を伴って人相の悪い人物が近づいて来るのが見えた。

頭はスキンヘッドだが、紺の背広を着ている。  
館長が男を紹介した。

「遠藤くん。公安の久利坂さんだ。君の坂本龍馬に関するプログを見られたそうだ。それで…話しがあるとおっしゃっている。第2会議室が開いている。そこで話しをしよう」

久利坂と呼ばれた男は、軽く会釈した。館長の顔には緊張が走っており、冷や汗が浮かんでいた。冷静沈着なボスで知られる館長の様子は、明らかにトラブルを知らせていた。

「久利坂です。遠藤理香子さん。お時間は取らせません。すぐに終わります。よろしいでしょうか？」

物腰は柔らかいが、突き刺すような視線が理香子を威圧した。

「はい…。わかりました」

理由がわからない以上、そう言うしかなかった。

3人は第2会議室のガラシとした午後の光の中に腰かけた。

久利坂は、以前に見た居合い抜きの人達に似ている…と理香子は思

った。こちらの体と思考を封じられるように間合いを使ってくる。

「まず。遠藤さんが昨日手に入れられた文書なんですけど…え〜と、海援隊日誌の陸奥宗光が書いた、紛失していた3枚のメモですが。あれは国家機密文書になってまして、速やかに返還して頂きたい」

久利坂は、事務的に言って理香子を見た。  
理香子は全身に震えが走った。そして恐怖が来た。その3枚は、手に入れた事を誰にも言っていない。もちろん、プログにも書いていない。

「…。どうして。私がそれを手に入れたと？」

久利坂はニヤリと笑った。文書を渡してくれた人物は、異常な程警戒してくれていた。絶対に知られるはずがなかった。しかし…久利坂は普通の事のように、返還しろと言っている。

「そう言った事を探知するのが我々の業務です。方法は、職務上の守秘義務に抵触するの言えませんが」

無駄だと分かっているものの、理香子は抵抗を試みた。

「なぜ機密なんです？。龍馬がファンケル バーグと会っていた事が？」

久利坂は少し間を開けて答えた。

「知りません。我々は、機密文書指定の根拠に関心は有りません。指定されているか、いないかに興味が有ります」

「渡さないと…家宅捜索ですか？」

「やります。だが女性の部屋をメチャクチャにするのは、良心がとがめる。出来れば、ご協力頂きたい」

理香子は観念した。

「わかりました。今から行きますか？」

「ほう？。話の判る方だ、遠藤さんは。ついでに、あなたのデスクに寄って、引き出しのファイルにあるコピーも頂けますか？」

「仕事に抜かりは無いんですね」

「もちろん。日本の安全保障に関わる事です…」

久利坂はいったん言葉を切ってから言った。

「…さっきの電話。坂本龍馬さんがどこかに、お見えになつてるとか？」

久利坂は、わざと顔を横向けて、左耳に入っているイヤホン見せた。イヤホンから出たコードは、無線機に繋がっているはずだ。

「彼は慶應3年に殺されています」

「確かに。140年前に。じゃあ、同姓同名のお友達ですか？」

「私ではなくて、ボーイフレンドの友達です」

「なるほど」

「公安の方とは言え、私的な通信を盗聴する権限は無いと思いますか？」

久利坂は、じつと理香子を見た。

「失礼した。謝罪します。今の話は無かった事で…では行きますか？」

館長が苦々しい顔で理香子に言った。

「遠藤くん。速やかにコピーと原本を返還して、事態を收拾しなさい」

「わかりました。すいませんでした館長」

「わかればいい。行きなさい」

館長は立ち上がって、理香子を促した。

久利坂は紳士的に振るまって、コピーと原本を手にすると、理香子のアパートから素直に帰って行った。気味の悪い人物だが、根本から危ない人間ではないように理香子は感じた。

久利坂には、もうこれで美術館には戻らないと言っただが、鍵を掛けてアパートを離れた。道路に出ると、車が後ろから近づいて来た。

「遠藤さん。お出かけなら送りますが？」

久利坂だった。

車をゆっくり走らせながら、理香子を見た。

「いえ。ボーイフレンドに会いますので…お仕事にお戻り下さい」

「久屋大通公園なら、ちょうど通り道です」

「だったら、先に行かれてはいかがですか？」

理香子は立ち止まって、声を荒げた。

久利坂は急ブレーキを踏んで揺れた。

「まあ、落ち着きましよう。私を安心させて下さい。そのボーイフレンドとお友達に会わせて頂ければ、退散します」

理香子は腹が立ってきた。

「お断りします。法律に触れてないのなら任意でしょう？。任意ならお・こ・と・わ・り・し・ま・す」

「お気持ちは解ります。ただ、あなたの立場を危うくしたくない。坂本龍馬に関しては、あなたが思うよりも大きな力が関わっています。あなたは前途ある研究者だ。ストリートに行くのは得策ではない。やり方が有る。私をあなたの陣営に加えて頂ければ、危険を回避しつつ、坂本龍馬の不明な部分に光を当てられる」

「信用できると思ってるんですか？」

「…できるのではなく。信用すべきだ。久利坂家の先祖は、坂本龍馬 中岡慎太郎暗殺の捜査の指揮を採っていた。だが、捜査途中で大久保利通に担当を外された。暗殺の真相を明かすのは、久利坂家の仕事だ。つまり…公安としてではなく、久利坂家の者としてお願いしたい」

理香子は、ある事を思い出した。

「海援隊日誌紛失の3枚は、元々久利坂家の所蔵でしたね」

「そうです。明治20年。何者かに忍び込まれて持ち去られた」

理香子は迷った。この警官を信用して大丈夫か…。

「あなたには、逮捕権がある。あらゆる理由を行使して」

「建前はそうですが…しないとお約束しましょう」

「そんな事して、大丈夫なんですか？」

久利坂は遠くを見る目で言った。

「長い人生の中には、大丈夫じゃなくても。やらなきゃならない事

「が有ります」

久利坂は、助手席のドアを開けた。

「失業しても、お仕事はお世話できませんよ？」

うなずく久利坂の横に、理香子は座った。

次話！

―第5話才谷梅太郎 ストーリーは戻って、2009年に跳ぶ前の慶應3年。アメンティティは、才谷こと坂本龍馬を暗殺から救う為、彼を説得する。暗殺には楽観的な坂本龍馬を動かした事とは？。身の危険を冒すアメンティティの真意は？。

## ― 第5話才谷梅太郎

### ― 第5話才谷梅太郎

慶應3年に来て、5日が過ぎた。

アメンテイテイは、あめたにたろう雨谷太郎の名で、かへい酢屋の主人六代目嘉兵衛に紹介されて、海援隊士として2階で寝起きしていた。

動けるようになったが、酢屋の前を幕府の密偵がうるついていると言ふ理由で、外に出られなかった。

ない…。 酢屋嘉兵衛の娘、千代が昼食を持って上がってきた。膳が一つしかない…。

「才谷さんは？」

千代は面倒くさそうに答えた。

「才谷さんは、お出かけです。なんでも大目付の永井尚志様にお会いに行かれたとか」

「幕府の密偵が外で見張ってるのに、何で幕府の大目付に会いに行くんです？。話が矛盾している」

「知りまへん。才谷さんは、ようわからんお人です」

千代は、おひつから飯を盛ってお膳に置いた。

「それにもまして、雨谷さんもわからんお人どすな」

「何が？」

「天竺のお釈迦様のような顔をしてはりますが、妙な言葉使いをされます。お国はどこどすか？」

アメンテイテイの遠い先祖は、紀元前に日本人と同じ民族だった。

この時代は、原始人が裸で、狩や木の実の採集をしていたとされている。しかし、全世界的に国家があり、その国家は宇宙空間に居住できるコロニーを浮かべていた。人口爆発により環境的危機に陥った地球を救う為に、80%近い人々が地球を離れた。完全に接触を断つた為に、地上の文明は崩壊した。残った20%の人類は、原始的生活に耐えて、現在の文明を0から築き直した。だから、国はどこかと聞かれたら、地上に残った同民族の国の名前をコロニー1704の人々は口にした。アメンティティも例外ではない。

「国は。日本だ」

「にほん？。それはどこですか？」

部屋の壁に、世界地図が張ってある。アメンティティにしてみれば、不正確な絵地図だったが…立ち上がって、そこに小さく描かれている日本列島に人差し指を置いた。

「それは、ここらあたり全部の事ではないですか？」

千代はからかわれたと思つて、ふくれた。

「千代さんも私も日本人だ。これからは、藩は無くなる。全部日本国になる」

「それは、才谷さんがよう言わはる事どすな。天皇さんが、藩全部を治めはるんでしょ？。途方もない話や。天皇さんは御所を出た事もあらしまへんのに、蝦夷地えそちから琉球まで、どう治めはるんやろ…。それに町中では、戦がある言うつわさどす。薩摩が將軍さんを攻めにやってくる…京は焼かれるかもしれへん言つてます」

「才谷さんが京が焼かれないように、働いてます。あの人が生きてる限り、京は焼かれたりしないですよ」

「そやな。才谷さんならそれくらいやってくれはりますな」

格子窓の向こうでは、材木を積んだ舟の上で、人足が弁当を食べている。

「…そう言えば。才谷さんは土佐藩邸向かいの近江屋さんに移らるらしいどす」

「どつして？」

「土佐の後藤様が、藩邸の向かいに移るように言わはったとか…何だか中岡様の陸援隊の中に、才谷さんを悪く言うお人が居るとか…岡本健三郎さんが言うてはりました」

千代は心配そうな顔をした。

「じゃあ、こつちには戻つて来ないんですか？」

「多分、そうやと思います」

しかし、才谷梅太郎の姿が格子窓の向こうに見えた。

「あつ！。才谷さんどす」

千代は立ち上がって、スタスタと階段を下りて行つてしまった。

「千代公か。雨谷はちゃんとおとなしゅうしちよるか？」

と言う声が下から聞こえてきた。

アメンティティは、さっきの会話を思い出しながら、遠い記憶を探った。ホティオティから聞いた坂本龍馬の話を…ホティオティは、コロニーの大学で日本史を専攻していた。

それによれば、11月15日に近江屋新助宅2階で、京都見廻隊によつて額を割られ絶命する。彼が生きていれば、翌年1月から始まる戊辰戦争は起こらないだろうと。8440名以上の戦死者を出し、勝った側にも多くの財政破綻を引き起こした。明治政府は、明日政府が倒れても不思議は無いと言う…綱渡りの国家財政を抱え、国民に過酷な重税を課した。暗殺と謀略の暗澹たる明治時代は、この戊辰戦争が原因だとホティオティは語った。アメンティティにもホティオティにも、同民族の悲劇は見えて見ぬ振りの出来ない話だった。時空間スパイラルを使って、歴史を改変する議論は散々（さんざん）行われてきた。結論は出さずコロニー政府は、緊急時以外のポッドの使用と時空間スパイラルへの侵入を禁じた。しかし改変自体は、結論が先送りされており、法律がない。坂本龍馬が暗殺されなければ、アメンティティ自身も論争の荒らしの中に巻き込まれるのは間違い

ない。それでも、アメンティティはやるつもりだった。暗殺は間違  
いである事を証明する為に……。頭カウズに閃いたのは。

才谷梅太郎を殺させない。

彼を高台寺からホシオカユキヒロの所に飛ばしてしまう。ホシオカ  
を通じてホティオティに連絡をとる。才谷梅太郎を、戊辰戦争を止  
められる、最も良いタイミングで戻す。

才谷は千代を従えて、2階に上がって来た。

「雨谷さん。しばらくわしゃあ近江屋に移るきに、何か有れば誰か  
走らせよってつかわさい」

アメンティティは才谷を見つめた。才谷も見つめ返した。

「何ぜよ」

「才谷さん。11月15日に、あなたは何者かに殺されます」

才谷は冗談でも言われたように笑った。

「そんな事か。この京じゃあ、今斬られても可笑しくないき。心配  
するだけ無駄ぜよ」

才谷は、まるで自分だけは斬られる事はない…そう思っているよう  
に見えた。後世では文献から、この時期大目付永井に身の安全を保  
証されていたと解釈されている。

「才谷さん。近江屋新助宅2階であなたは殺される…犯人は京都見  
廻隊か薩摩の刺客か、あるいは土佐の倒幕派、アーネスト サトウ  
の放った暗殺者が判らない。今すぐに、この時代を離れて下さい」  
「時代？」

アメンティティは、自分の脱出用の水晶を才谷に見せた。

「これを、高台寺開山堂の裏の石塔の鷲の目に入れれば、140年  
後の世界に行けます。そこからホシオカ ユキヒロと云う人物に会  
って、私の妻を呼んで下さい。そして、11月15日より後に戻っ

てくるんです。そして、鳥羽伏見で起こる、武力倒幕派と幕府の戦争を止めて下さい。8440名以上の命と、日本の苦難を救って下さい」

才谷は、水晶を見た。

「いかん。それは、雨谷さんが戻る為の物じゃ」

「妻に頼んで、私の分の水晶を持って戻って下さい。それで、私は戻れます」

才谷は腕を組んで、目を閉じた。

「雨谷さん。142年後の世界と云うは、どんな世じゃ？」

「議会制民主主義。あなたの夢見る世界です。…問題はたくさん有る。有るけれど、土農工商の幕藩体制よりはマシです」

「土農工商の無い世が来るか？」

「身分に関係なく、議会に参加して意見を言える世になります。年齢が達すれば、千代さんでも議会に参加できるように成ります」

「千代公が?…」

才谷は恐い顔で続けた。

「そりゃあいかんぜよ。家事が嫌いな千代公に、逃げ出す口実が出来てしまう。嫁に行かれんぜよ」

横で千代がふくれているが…才谷は途中から、顔がニヤけている。

そして笑い出した。笑った後、恐ろしい程の真顔になった。

「雨谷さん。それが真なら、わしゃあ死ぬわけにはいかん。まっこと危うい思うちよるは陸援隊じゃ。陸援隊は武力倒幕のもんじゃき、次の王政復古でも戦にならんとなつたら、ただでは済まんと思うちよる。中岡慎太郎が今は抑えちよるが…いつまで抑えられるか…」  
アメンティティはタタミかけた。

「土佐藩の人間が相手では、京に隠れる場所は有りません。逆に土佐藩の人間を斬る訳にもいかない。でも、京を離れるとなると近くに居場所がない。ならば、この水晶で飛んで、16日に戻って来て下さい」

才谷は算術でもするように、目を上に向けて小さく頷始めた。

アメンティティはジッと待った。

「おもしろい。やってみるぜよ」

才谷は、居合い抜きのようにスツと、アメンティティの手の上の水晶を攫さらってみせた。

千代は、何の事やら判らない顔をしている。

「才谷さん。どこに行きはるんどす?」

才谷は水晶を見つめている。

「16日まで、142年後に行くぜよ」

「それは、どこどすか?」

才谷はアメンティティを見た。

「名古屋。久屋大通り公園ロサンゼルス広場」

「名護屋のろさんぜるすじゃ。千代、名物を買ってくるきに。楽しみにしちよけ!」

千代は半信半疑な顔で、才谷につられて笑った。アメンティティは、やっちまうぞと覚悟を決めた。そして、星岡と理香子 ホテイオテイが上手くやってくれる事を信じて疑わなかった。だがそれが、とってもハタ迷惑でとんでもない事だと云う事に思いが及んでいなかったが…。

次話!

### ― 第6話妨害

久屋大通り公園に向かう理香子と久利坂。バックミラーに、イギリス特務機関の影が! 窮した久利坂は、禁断の2部をコールする!。



## ―第6話妨害

### ―第6話妨害

理香子に乗せた久利坂の車は、久屋大通り公園に向かっていた。車は古そうだが、車内はチリひとつ無く掃除されている。理香子は、警察車両に有るはずの物が無い事に気づいた。

「久利坂さん。この車…無線が無いのは何故です？」

久利坂は前を見たまま答える。

「任務によっては、こういう車両も使います。無線、サイレン、回転燈も積んでない。そのかわり、この車は鈴鹿サーキットで勝てるレベルにチューンされてまして…その手の任務に使います」

久利坂は、バックミラーをチラツ　チラツと、規則的に見るようになった。

「誰か…つけてるんですか？」

「ええ。多分…イギリスの…識別名称サトウチームって云う、結構レベルの高い特務機関です。坂本龍馬関係にヘンリーパークス、アーネストサトウ関係で出勤して来るんです」

「第2代イギリス公使に。その通訳官。サトウはイカルス号事件で龍馬とやりあつてる。イギリス水兵を2人殺害した犯人は、海援隊隊士だと言いがかりをつけて…」

「ああ…サトウが言ってる事に、龍馬が笑ったんで、叱りつけたら悪魔のような顔になって黙ったって話ですか…。人の国に来て、理

不尽に威張り散らされたら、何様だつてムツとするのは当然でしょう。それも、いい加減な状況証拠で」

そう言う久利坂に、理香子は考え込みながらつぶやいた。

「…専用のチームをイギリスが編成してるのは何が有るんだろう…。アーネストサトウが、薩摩土佐と言わずに…武力倒幕を考えてる人達に、龍馬が外国4ヶ国はもちろん…幕府ともパイプを持っている事を、悪意を込めて洩らしたと云う説が有ります」

「つまり。龍馬は、外国と幕府の手先だと…。そう言えば、仲間の誰かが龍馬を襲うのは目に見えてる。黒幕はイギリス公使館説つて所ですか？。本当なら、日本の反イギリス感情は増大するでしょうね。100年以上も前の事とは言え、謝罪しろなんて話になるかもしれない。サトウチームなんて名前を付けている所を見ると、案外凶星かも知れない」

突然。

久利坂は、急ブレーキを踏みハンドルを切つてテールをスライドさせた。

そして、反対車線に入るとアクセルベタ踏みで走り始めた。

それを久利坂は、理香子の体を左手でシートに押し付けながら、眉毛ひとつ動かさずにやってのけた。

「どうしたんです！久利坂さん」

久利坂の表情はまったく変わってない。

「実力公使です。始まりました。私に任せて下さい」

久利坂は、運転しながら巧みに理香子のシートベルトを装着させた。車は前後左右のG（重力加速度）に揉もまれてる。

そして、携帯を取り出すと、見もせずリストを選択して電話を掛けた。

「…2部か？久利坂だ。サトウチームが名古屋広小路通りで、やりたい放題だ！。5分で何とかしろ。出来なかつたら、お前らの部長をクビにしてやる！！」

久利坂は、理香子に理解不能な事を言つて携帯を切った。

「5分時間を稼ぐ。後は、外国スパイ専門の連中に任せる」  
理香子は、アクセルベタ踏みの車で名古屋市内を逃走する事態に陥おちいった。気持ち悪いどころではなく、前後左右のGで死にそうだった。

「来たっ!!」

久利坂が叫んで、車のスピードが緩んだ。

「4分ジャストか。さすがは白根部長。いい仕事をしてくれる」  
理香子は、助手席で気絶していた。久利坂は、いったん公衆トイレの前で車を止めると、理香子に当て身を入れた。気が付いた理香子は、必死に吐き気をこらえた。

「トイレが有る。吐いた方が楽になる」

久利坂は素早くシートベルトを外して、ドアを開けた。  
口を押さえながら、理香子はトイレに駆け込んだ。

星岡は、遅いと思いつながらダンボール小屋の前に立っている。そこに、青白い顔をした理香子が、背広姿のスキンヘッドの男と現れた。

「どうした?。大丈夫かあ?」

理香子は涙を溜めた目で言った。

「大丈夫じゃない。車に酔った」

「どういう事だ?」

星岡は背広スキンヘッドを見た。

「君らは、イギリス特務機関の任務対象になった。連中を巻く為に、乱暴な運転をしたので、君のガールフレンドは酔ってしまった。申し訳ない」

久利坂は軽く頭を下げた。

「誰だ?あんたは?」

理香子がいきさつを話した。

「坂本龍馬が居るだけでもややこしいのに…先祖の無念を晴らしたい公安警察官とは。加えて、イギリス特務機関だつて？。007が出て来たら、気絶させてもらうぞ…」

理香子は手で、愚痴っている星岡を制した。

「それで。どんな事情で坂本龍馬が居るの？」

「あああん…？。アメンティティだ。また遭難して、慶應3年に脱出したらしい。脱出した場所が、この間理香子と行った酢屋の前で…龍馬に助けられて…自分の水晶で龍馬を現代に飛ばして、この有り様だ」

「どうするつもりなの？」

「暗殺された11月15日以降に、アメンティティ用の別の水晶を持って、龍馬を戻せて事らしい。それで、20のコードを弾いてホテイオティと連絡をとらなきゃならない」

久利坂の眉間にシワが寄った。理香子がそれに気づいた。

「久利坂さん。どうしたの？」

「遠藤さん。星岡さん。そのエジプト人みたいな名前の人物は、もしかして宇宙人？ですか？」

「間違いなく…。なあ理香子」

理香子は星岡に同意した。

「それはそれとして、宇宙人関係の特務機関も存在しています。こちらは、かなり危険な連中です。やるなら、最短で行動すべきです」  
星岡は空を仰いだ。

「気絶してるヒマはないか…」

次話！

― 第7話 遠藤研究員 坂本龍馬と会見する

。 歴史上の謎はすべて答えが出るのか？しかし、時空は理香子と星岡を呑み込んで流れ始めていた！！。

― 第7話遠藤研究員 坂本龍馬と会見する

― 第7話 遠藤研究員 坂本龍馬と会見する

星岡が再び、才谷梅太郎を呼んだ。ダンボール小屋の所有者である宮本は、用があると言って出て行った。才谷は、またノツタリと出て来た。

理香子は、息を吞んで才谷を見た。写真よりも元氣に見える。しかも、手には携帯を持っている。

「遠藤理香子です。才谷梅太郎さんですか？」

「あゝ理香子さん。才谷です」

「あの…携帯で何を？」

才谷は照れくさそうに笑った。

「けんさくをやっちゃりました。エグレスもメリケンも相変わらずじゃ。道具は凄くなったが、人は変わっちゃらん。やり口は同じじやき」

理香子は、才谷の順応性にあ然とした。明治から昭和 平成に至る日本社会の基本的な部分は、龍馬の構想の中に有った事は良く知られている。同時代の人間の中で、彼だけが…。この順応性こそが、その理由だと理香子は感じた。

「…。才谷さん。聞きたい事が有るの」

「何ぜよ」

「才谷さん。ファンケル バীগ公使とは、話をしてるの？」

ファンケル バーグは、アメリカ公使館の公使だ。

「会つちよる。エゲレスが西郷や大久保を、煽あおつちよるきに。戦にせん為には、ファンケルバーグの後ろ盾だてが必要じゃき」

「あなたが、ファンケルバーグと話をしている記録が無いの。陸奥宗光が、会つてる事だけメモに残してるのを見つけたけど…」

「そりゃあそうじゃ。今世界は、エゲレスの力が強い。メリケンが工作すれば圧力が掛かる。全部内緒じゃ」

「確認させて。あなたは、メリケンを後ろ盾にしてるの？」

「そうじゃ。エゲレスもフランスも仕組みとしては、行き詰まっちゃう。行き詰まって戦ばかりじゃ。だがメリケンの仕組みは、エゲレスやフランスより優つちよる。これからは、議会制民主主義ぜよ」

「メリケンを後ろ盾にしてるのは、あなた以外には？」

「勝じゃ。後は大目付の永井。老中も將軍も本音はエゲレスでもフランスでもない。大政奉還は今言った連中でやった。…だが土佐藩は何処どことも組よらん。組よらんきに、動かすのに骨が折れた。土佐藩から話が出たと云う事にならんと、辻褄つじまが合わんきにな」

「出来レースか…大政奉還は」

久利坂がつぶやいた。

「じゃが。要かなめは西郷じゃ。西郷が動かんと言つたら、小松も藩主も動かん。大義名分が無くても、西郷が動くとなれば戦になる。西郷もファンケルバーグに会つちよる」

理香子は目を見開いた。

「まさか…。西郷は、アーネスト サトウと頻繁ひんぱんに会つてるのが日記に残つてますよ？」

才谷さんはニヤリと笑った。

「じゃが、西郷はサトウの援助を断つちよる。今やらなければ、革命の機会は失われるなんぞと、戦を煽つちよる。こん国で東洋人が何千人死のうと平気じゃ。人の誇りを傷つけても何とも思わん。礼

節を知らぬが、大砲や鉄砲で脅すのは平気な連中じゃ。メリケンと組まねば、こん国の将来は成り行かんぜよ」

「つまり。西郷もメリケンの側だと？」

「桂も岩倉も西郷も大久保も…新政府はエゲレスと距離を置く方が良いと言っちよる」

事実。日露戦争の前まで、イギリスから離れようとしている。それが理由で、西郷は西南戦争で、大久保は暗殺されたとする説もある。

星岡は、良く解らないと云う顔をして言った。

「サトウってのは誰なんだ？理香子？」

「イギリス公使館の通訳官で、日記を残してるの。外交官の見た幕末って本も出版してる。イギリス公使館は、幕末の日本における勝者よ。でも…坂本龍馬が生きてれば、本を出版する気にはならなかったと思う」

「何故？」

「通訳官サトウも。ヘンリー パークス公使も。日本の内政に干渉する事は出来無くなったと思うから。不平等条約も、もっと早く改正されたでしょうね」

星岡は、上目使いになつて言った。

「陸奥宗光のアレか？」

才谷が眉を上げた。

「星岡さん。陸奥を知つちよられますか？」

「たしか…外務大臣に成つて、不平等条約の治外法権を改正した人だったよな…理香子？」

「そう。才谷さんの知っている陸奥は、まだ海援隊隊士だけど」

「ほう。陸奥は外国と渡り合いますか…陸奥は剃刀カミソリのように切れるきに」

才谷がそう言った所で、久利坂が何かに気付いて、手で全員を制した。

久利坂は、顔の緊張を緩めて、男が近づいて来るのを待った。

「久利坂さん。何をやらかしたんです？。ここらあたりに、各国の特務機関が大集合してますよ」

「柔らかい顔をしているが：明らかに気配がただ者ではない。」

「ご苦労様です。白根さん。岐阜以来ですね。実は、才谷関係で事が起こってますよ」

「でしょう。イギリス大使館は火がついたようになってますよ。恐らく、抗議が総理に出ると思います。落とし所を打ち合わせましょう」

星岡は出て来る名前の高さ恐怖を感じた。

久利坂は、白根に言った。

「落とし所は、全員がいったん消える事で、しゅうしゅつ收拾出来ると思います」  
「消える？」

白根と星岡がハモった。

「ええ。関係者全員が、いったん慶應3年に行きます。その為には、2部にロサンゼルス広場を30分確保して頂きたい」

白根は心配そうな顔で返した。

「37分まで可能ですが。久利坂さんの立場が危うくなりませんか？」

「才谷梅太郎：龍馬さんの為なら、大した事では有りません」

星岡は、割って入った。

「待った！。関係者全員つて、何で俺や理香子まで行かなきゃならないんだ？」

久利坂は、星岡の顔をゆっくりと見た。

「残った場合。お二人の安全を確保する事は不可能です」

「つまり。突っ込んだ首は抜けないって意味か？。勘弁してくれよ幕末なんて」

「行きましよう。戻った時には、この白根部長が事態を收拾して下さってるはずですよ」

白根がアキラメロと目で星岡を見た。

「お任せ下さい。星岡さん。遠藤さん」

白根は、まるで自分達を知っているかのように言った。

「そう言えば…宮本さんは？」

久利坂が言った。

「星岡さん。彼は私の部下です。すでに脱出しました」

星岡は、ため息と共に、自分達がかかり前から段取りに加えられていた事を知った。

次話！

― 第8話 中岡慎太郎

じわじわと才谷梅太郎に暗殺の危険が迫り来る…心配した陸援隊隊長中岡慎太郎が酢屋を尋ねて来た。140年後の世界に飛ぶ為に高台寺に向かう才谷とアメンティティだったが…。

― 第8話 中岡慎太郎

― 第8話 中岡慎太郎

慶應3年11月12日

アメンテイテイは、才谷と高台寺に行く予定だった。

朝飯を食べていると、外に人影が現れた。

下で声がして、千代が降りて行って戻って来た。

「石川清之助さまがお見えになってますが、お通ししはりますか？」

「石川か……。通してくれ」

いかにも堅い感じの男が上がって来た。四角い顔に、太い眉毛が少し間を開けて、キリツと見開いた目の上に有る。少し猫背気味に見える。

「才谷。誰じゃ？」

疑わし気に、石川はギリりとアメンテイテイを見た。

「隊士の雨谷じゃ。国は何処どこか聞くな」

「何故じゃ？」

「おまんの知らん国じゃきに、聞くだけ無駄ぞ」

石川は、いつもの冗談だと思って、面倒臭くなったようだ。それ以上聞くのをやめた。長い刀を腰から外して、2人の前にドカッと座った。

「才谷いかなぜよ」

「何がいかん？」

「エゲレス公使館の通訳が、会うもんにことごとく、おまんが幕府の手先じゃ言うちよるらしい」

「イカルス号の時に、言いがかりを付けて来たサトウとか言う小役人か…。文句を言つても聞く耳はなかるう」

「ノンキな。陸援隊の隊士が、坂本はおかしいと騒ぎ始めちよる。

薩摩の藩邸も同様じゃ。幸い西郷と大久保が抑えちよるが…陸援隊はもとより土佐藩邸は、抑えられる自信は無いぜよ。それに加えて、大目付の永井に会つちよる噂が流れちよる」

「それは、事実じゃ」

アメンティティの方が、才谷よりハラハラし始めた。本人はのほほんとしているように見える。石川は苛立つて、身を乗り出した。

「龍馬。武力倒幕を考えちよるもん全員があおまんを斬りに来るぜよ。京を出るか、釈明するかせい」

石川は本気で心配し始めた。才谷の本名を言ってしまった。才谷は急に恐い顔になった。

「石川あ。戦をすると押さねばならん。押した上で、幕府が持つちよる権力を離してゆく。顔を潰されれば、幕府も戦をせねばならん。顔を潰さぬようにして退路を作つてやれば、年明けにも新政府が発足できる。もし…それをせずに戦になれば、金もなく街も焼け。産業なく。援助金にすぎりながら、外国商人の好き勝手がまかり通る世になる」

石川は頷いて言った。

「それは聞いた。じゃが幕府は引くか？。新政府でも生き残る算段をしちよるようにしか見えん」

「そこが難しい。幕府が引くと判つたら、武力倒幕の熱は冷める。冷めたら、幕府の内部分では、引かんでも行けるつちゆう話になるぜよ。それでは倒幕は成らん。戦じゃ戦じゃ言う中で、幕府が引いて行かねばならん」

石川は、あきらめたように黙つた後に言った。

「それを言っても、わし以外のもんは納得せん」

「ならば。4日から5日消えるつもりじゃ」

「長崎か？。あそこも安全とは言い切れんが…」

「いや。この世から消える。4〜5日な」

「おまんの事じゃ。抜かりは有るまいが。京を出るのも気をつけんと…危ういきに」

才谷は笑った。

「心配するな」

石川は目でうなづいた。

「そうか。では…」

「行くか？」

「薩摩藩邸に行く。西郷に言づては有るか？」

「いや」

石川は、うなづいて立ち上がった。アメンティティにも目礼して去った。

アメンティティは聞いた。

「あれは誰です？」

「陸援隊隊長の中岡慎太郎ぜよ。切れ者で腕も立つ。人間は実直じやが…堅とつて融通が多少きかん。陸援隊は武力倒幕の組織じやきに、適役ぜよ」

才谷は箸を膳の上に置いて立ち上がった。

「雨谷さん。行くぜよ」

2人は階段を降りて、酢屋を出た。千代が黙って、その背中に無事を祈った。

高瀬川に架かる橋を渡り、鴨川と高瀬川の間を南に歩いて行く。才谷は四条大橋で鴨川を渡り、建仁寺の南側から建伝町を回り込み、弓矢丁で東に折れ、愛宕寺の前を通り、三叉路を北に折れた。そこから路地を東に入って行く。高台寺の南側、台所口の門が見えた。その台所口の並びに月真寺が有り、高台寺党の屯所になっている。

台所口の門は開いており、才谷はためらう事なくそこに入った。ゆるい坂になっており、石段が組まれている。

その坂に入った所で、後ろから走ってくる足音が聞こえた。

「雨谷さん。走るぜよ」

才谷は、振り返りもせず、坂の上の高台寺本堂の門に向かって、走り始めた。アメンティティもついて行く。才谷は門を入ると、柱の陰に回り込んで身をひそめた。アメンティティも同じようにする。

…その目の前を、中岡慎太郎が走り抜けて行った。

しばらくして、数人が坂を駆け上ってくる足音がして、今度は4人が駆け抜けた。

「…先頭は田中だな。最後は駿馬か?…」

才谷がつぶやいた。

「幕府の役人ですか?」

「いや。土佐の仲間じゃ」

「じゃあ、何か急ぎの知らせが有るんじや?」

「違う。四条大橋から尾行られちよった」

「中岡さんが?」

「いや。尾行ちよったあの4人に気がついて、中岡が先回りした感じじゃ」

「なら…4人の用と言っつのは?」

才谷は微笑みながら言った。

「あいつら…わしを斬る気ぜよ」

アメンティティはハツとした。

「その流れなら。今走って行った中岡さんも危ないんじや?」

「そりゃあいかん」

才谷は微笑みを引つ込めて、中岡慎太郎が走って行った方向に向かった。

開山堂西側の臥龍池がりょういけで、中岡が4人に囲まれているのが見えた。

「坂本さんはどこですか？」

1人が、中岡を詰問している。

才谷は臆おくする事なく出て行った。

「田中あ。わしゃあここぜよ。何ぞ用か？」

詰問していた男が振り返った。目が見開かれて、驚いている。震える声で言った。

「坂本さん…どこに行かれますか？」

「田中あ。問いが変ぜよ。高台寺に来たのが判らんか？」

「にっ逃げるおつもりか？」

「何から逃げる？。おまんからか？」

田中と呼ばれた男も後の3人も、完全に気を削そがれている。

「坂本つさん。坂本さんが居る限り、徳川は倒れん。よつて…お命を頂きたい」

「目え覚ませ。戦で倒す必要などない。圧をかけ続ければ、徳川は消えて無くなる。それを戦にしたら、人も金も町も産業も無くなる。なくなつたら、どうやって外国と渡り合う？。この国は外国人の思うままにされてしまつぜよ」

「脅すだけで、徳川が消えるなど…有り得ん」

言つて、田中は刀を抜いた。中岡は飛び退さがって、刀の鯉こいくち口を切つた。

残りの3人もバラバラと刀を抜く。

才谷は抜かない。

2人が中岡に対した。

残り2人が…ゆつくりと、こちらに向かってくる。

「才谷さん。開山堂の裏で、飛べるように用意してきます。時間を稼いで下さい」

「わかった」

アメンティティは、クルリと後ろ向くと、全速力で走った。

―雨谷は放つちよけ―

怒鳴る才谷の声が聞こえた。

アメンティティは、池の北側に、墓石を見ていた。いったん逃げる振りをして、本堂を回り込み墓石の有った方向に向かう。

墓石が見えてきた。鷲わしの石塔を見つければ助かる。

墓場は小山になっていて、池の周りを逃げ回っている才谷と中岡が見える。刀を抜いた4人をかわして、2人は逃げ回っている。

―やめちよけ。わしが抜いたら、北辰一刀流免許皆伝ぞ。おまんらを斬る訳にはいかん―

才谷が叫んでいる。

アメンティティは、墓場の中を必死に探した。

それは、まさに開山堂と思われる建物の真裏に有った。

水晶を鷲の目にはめ込む…。これはロサンゼルス広場の物とは違って、自動的に5分で発動する。

アメンティティは、下で走っている才谷に向かって叫んだ。

「才谷さん。用意できました。来て下さい」

―おう―待つちよけ―

返事が返って来た。

2人は時間ギリギリに斜面を登って来た。

「青い光の中に！」

才谷は石塔の前に立った。

「中岡さん。才谷さんを守って！」

「よっしゃ」

中岡は刀を抜いた。4人が3人を取り囲む…。

アメンティティは、腕のコンピューターに向かって言った。

「簡易シールド展開」

透明な膜が、アメンティティと中岡の前に展ひらがった。

4人同時に、刀で突いてくる。

ガアツ。

シールドと接触して、刀身は止まった。

「中岡さん」

「応よ？」

「逃げます」

すでに才谷は消えていた。

アメンティティと中岡は、石塔の脇を抜け、山の中に走った。シールドは15秒で消えたが、刀は数百度に熱せられた為…4人は刀を放り投げて、手を押さえた。気がついて追う前に、アメンティティと中岡は視界から消えていた。

ー次話！

ー第9話ミリティアアメン。再び現代。星岡は鷲の像の前で20のコードを弾いた…現れたのはホテリオティではなく？アメンティティのお姉さんにして、緊急脱出用ポッドの設計技術者だったが…。

## ―第9話ミリテイ アーメン

―第9話ミリテイ アーメン

再び現代。

星岡と理香子、才谷梅太郎に久利坂は、ロサンゼルス広場にやって来た。

「時間は、あとどれくらいです？。久利坂さん…」

「約15分程度」

周りは日曜だと云うのに、人影が消えている。しかも、遠くでサイレンが鳴り響き爆発音までしている。星岡はギターを取り出すとノートを広げた。あぐらを掻いて座ると、コードを鳴らし始めた。

20のコードが鳴った。

2秒後に空気を切り裂いて、青い光が落ちて来た。

光が消えると、某有名デパートの制服を着た女性が現れた。

星岡と理香子がハモった。

「ホテイオテイ？…じゃない？」

女性はホテイオテイよりも背が高く、お腹も大きく無い。

耳までのストレートの髪に、赤いフレームのメガネを掛けている。

彼女は、星岡をジッと見て言った。

「ホシオカさん？。私はアメンテイテイの姉のミリテイと申します。

アメンテイテイの消息をご存知でしょうか？」

「それが…」

星岡は、ミリテイと名乗る宇宙人と握手して、いきさつを手短に話した。

ミリテイは天を仰いで、ため息をついた。

「わかりました。弟のせいで、こんな事になって申し訳有りません」  
星岡はヤキモキして来た。

「ですがお姉さん。そんな事言ってる時間が無いんです！。この4人を、慶應3年12月16日に送って下さい。選択肢は無いんです」  
ミリテイ姉さんは、慌てる素振りも見せない。

「わかりました。私も行きます」

「いや：お姉さんはチョット行かない方が…」

ややこしくないと云う言葉を、星岡は飲み込んだ。

「いえ。緊急脱出用ポッドの設計技術者としては、責任を感じています。これ程不具合が生じては、黙っている訳にはいきません。5人分を送る調整をします」

イライラし始めた星岡達を尻目に、ミリテイ姉さんは鷺の像の台座の正面を開け、ゴソゴソやり始めた。

「あの。：どれくらい掛かります？」

理香子も焦って聞いた。

「安全係数を上げるには、30分必要です」

理香子は、久利坂を見た。久利坂が言う。

「ミリテイさん。あと6分経過すると、ここは滅茶苦茶になります」  
「では：ギリギリまで作業しますから、カウントダウンしてもらえますか？」

久利坂は、腕時計を目の前に上げた。

「：あと。5分10秒：」

星岡はたまらず言った。

「ミリテイさんもう行きましょう！」

ミリテイは四つん這いで、顔を台座に突っ込んだままだ。

「体がバラバラになって到着したくないでしょう？。専門家に任せ

て下さい」

「何で…ヤキモキさせるのは、アーメン家の家風なんですか？」

「皆さんそうおっしゃるわね…」

あっさり言われて、星岡は黙った。

久利坂の携帯が鳴る。

「…大丈夫だ。心配ない」

そう言っただけで携帯を切った。

「白根部長だ。まだ居るみたいだが、大丈夫かと聞いてきた」

星岡の腰が砕けそうになった時。

「オツケー！」

とミリテイ姉さんが叫んで、5人は青い光に包まれて飛んだ。

一方。慶應3年11月12日

中岡に先導されて、アメンティティは高台寺の墓地から、東に向かって斜面を登っていた。簡易シールドを使った為に、腕時計型解析コンピューターは、バッテリー切れを起こしていた。その為、東山を登って、栗田口に向かっている事をアメンティティは知らなかった。抗生物質の無いこの時代に、刀傷を負ったら傷口の感染症で2日と保たない。アメンティティは、中岡に必死について行った。

やがて尾根に出た。斜面は、登りから下りになった。

20m程下ると森が切れた。山仕事用の細い道に、2人は転がり出た。

立ち上がって、下りの方を見ると5人くらいの男達が居る。腰には大小刀を差している。上りに目を転じると、そっちにも3人居た。

アメンテイテイは、道から斜面に飛び降りようとしたが…中岡が袖を捕まえて止めた。

「ありや伊達小次郎じゃ。味方じゃきに助かったぜよ」

5人が下から登って来て、先頭の男が言った。

「中岡さん。隊長は？」

「別に逃げた。…なんで、おまんら海援隊8人勢揃いしちよる？。

大阪長崎に散つちよるはずじゃろうが？」

伊達小次郎と呼ばれた男が言った。

「2日前に手紙を受けておりました。高台寺で事を起こすので、事が破れた場合に、この山道に逃れてくるので救援に来いと」

伊達小次郎は土佐弁では無かった。

「ウム…事は成ったが、わしらはおまんらの事は聞いちよらんぜよアメンテイテイが代わりに答えた。

「襲つて来た4人に知られる訳にはいかなかったんでしよう」

「襲われましたか？」

伊達も他の7人も色めき立った。

「応よ。谷に毛利、田中に白峰じゃ」

「白峰…。駿馬でござるか？」

「間違いないぜよ」

伊達小次郎は、上目使いで何か思考を巡らした。

「駿馬までが加担していると。武力倒幕派全部敵と云う事でしょう。京師きょうしには、中岡さんも雨谷さんも身の置き所は無くなりま

したね」

中岡は慄然ふぜんとした。

「何たる事じゃ」

中岡の後をアメンテイテイが続けた。

「…おまけに、16日には才谷さんが戻って来てしまいます」

「雨谷さん。どこに戻って来る？」

「酔屋の前の舟入に落ちてくるはずです」

アメンテイテイは、星岡や理香子、さらに姉までが落ちてくる事は

知らない。

「消えたのは、高台寺じゃきに酢屋は安全じゃが…？」

伊達小次郎はそう言う中岡に言った。

「とにかく。この下の民家を借り受けています。そこに隠れましょう。おそろく…谷や毛利は薩摩や岩倉とも繋がってます。山狩りをするでしょう」

一行は、午後の粟田口を足早あしはやに駆け下りた。

―次話！

―第10話 龍馬暗殺される？

粟田口に潜む中岡とアメンティイティに知らせが入る。五つ半過ぎに隊長 中岡 藤吉が新撰組に斬られたと…。谷 毛利らの動きを封じる為の謀略に、海援隊が遺体が有ると云う近江屋おつみやに向かうが…。

## ―第10話龍馬暗殺される？

―第10話龍馬暗殺される？

アメンテイテイと中岡は、山里の民家に身を潜めていた。  
囲炉裏で暖をとるものの、寒い。

山仕事の作業小屋で、持ち主は居ない。海援隊が持つてくる、おにぎりだけが食事だった。そのおにぎりを、食べながらアメンテイテイは聞いた。

「伊達小次郎さんは、土佐弁じゃないですね」

「伊達小次郎は変名で、陸奥陽之助が本名じゃ。あいつは紀州の出じゃきに、土佐弁は話さん」

ここに隠れて、13日14日と陸奥がやって来て、数十人の武士が山の中に出没して居ると話していった。そして、今夜は15日の夜陸奥は現れ無かった。史実では坂本龍馬暗殺の日だ。しかし、彼はこの時代に存在しない。

日付が16日に変わろうとする頃、三上太郎と云う海援隊隊士が戸の向こうで、合い言葉を言った。

中岡が三上を招き入れる。

「こんなに遅くどうした？。陸奥に何か有ったか？」

三上太郎は、越前なまりの土佐弁と云う妙なイントネーションで言った。

「五つ半過ぎに、隊長と中岡さん藤吉が新撰組に斬られたと、藩邸

は大騒ぎになつちよります」

「何じゃと？。誰が言うちよるか！」

「藩邸で聞いた話ですが…谷や毛利が、菊屋の峰吉の知らせを受けて、近江屋に入ると隊長は頭を割られて絶命。中岡さんは屋根の上で重症との事でした」

中岡は目を剥いた。

「谷があゝ何を血迷うちよるか！」

中岡は刀をドスンと床に立てて怒った。三上がかまわず続ける。

「17日に葬儀が決まつちよります。我々は遺体を見せてもらえませんが、陸奥が藩邸に掛け合つちよりますが、近江屋に入る事もありません。陸奥が藩邸に掛け合つちよりますが、近江屋に入る事もありません」

「死体が無いぜよ。入れられる訳がない。後藤象二郎は何と言うちよる？」

後藤象二郎は坂本龍馬と中岡慎太郎の上司に当たる人物だ。

「後藤は、内輪もめで藩を割る訳にはいかん…事を荒立てるの一点張りで、話になりません」

中岡は目をつぶって考えた。

「もう16日の朝じゃき。才谷が戻って来る。わしや薩摩藩邸に行く。西郷に掛け合えば、谷らを押さえられる」

今度は三上が目を見つけた。

「西郷は助けてくれましようが、そこに行くまでに首が胴から離れましよう。お止め下さい」

中岡は浮いた腰を落として、首を振った。

「ならば何とする。座しとる訳にはいかんぜよ」

「高台寺党の伊東甲子太郎いとうかしだろうの与力を、陸奥が取り付けております」

「あれは、元新撰組ぞ。しかもこの山狩りも見て見ぬ振り…信用出来ん」

「出来ませぬ」

三上は言い切った。

「根拠は？」

「この民家は、伊東が世話してくれ申した。敵なら…中岡さんの首は、とつくに胴から離れておりましよう」

中岡は愁然とした顔をした。

「そうか…」

「ですが、隊長は甲子太郎の事は知りません。中岡さんが行かないと、斬り合いになるかもしれません」

「ここからどうやって、酢屋に？」

「今から山越で、五条橋下の材木屋敷の木橋に行き、鴨川を渡って下の口から高瀬舟に乗る手はずを整えてあります。出ましよう。ご案内申す」

16日の朝が明けた。

酢屋から数十メートル南の近江屋…東に大通りを挟んで土佐藩邸がある。

店先で海援隊が番人役と押し問答を繰り返している。

「何故、入れん！。斬られたは我が隊長ぞ！」

「藩邸の命でござる。新撰組が亡骸を奪いに来るとの噂が有る故、何者も入れるなどの命でござる」

「わしゃ新撰組か？。身内じゃ、海援隊じゃ。亡骸をどうにかすると思うか？」

「藩邸の命でござる。藩邸に掛け合いなされ」

「同じ事を我らは、一時半も繰り返しておるぞ。一目見れば済む故…融通せよ」

海援隊は押し通ろうとした。番人役は顔を真っ赤にして、わめき始めた。

「出来ん！。出来んもんは出来ん！」

「何だと…」

言い返そうとした千屋寅之助の肩を誰かが叩いた。

「寅之助…とりあえず退け」  
「小次郎か…」

小次郎こと、陸奥陽之助は近江屋前から、海援隊士を引き連れて北に向かつて歩き始めた。

「どうじゃった藩邸は？」

「後藤は相変わらずラチが開かん。それより、酢屋の舟人に隊長が戻って来るぞ」

「いつ？」

「今日である事は確かだが、いつかは判らん。中岡さんも雨谷も舟人で待ち受ける。我らで周辺を固めねばならん」

「谷達は、今日も山狩りらしいな」

「万が一の事が有る。谷らは心配ないが、薩摩は酢屋にも人を配して来るかもしれん。これは内密だが…この襲撃、エゲレスの画策じやと西郷から言づてが有った」

「西郷は敵か味方かどっちじゃ？」

「隊長をこの天地で、最も理解しているお人じゃ。だが、正面切れば、薩摩が割れる。そう言う事だ」

陸奥らが酢屋の舟人に達するのに五分と掛からなかった。酢屋は三条大橋から一本南の路地に入った所に有る。南から路地に入った。そこには。

丸に十の字の旗が立ち、50人程度の武士が立っていた。陸奥を始め海援隊全員の血の気が引いた。

―次話！

第11話 酢屋到着

星岡 理香子 久利坂そして才谷梅太郎。加えてミリテイ姉さん。

薩摩兵が待ち受ける酢屋舟入に落下する…5人の運命は？。

慶應3年の京で、歴史は思いもよらない方向に動いてゆく！

## ―第11話 酢屋到着

### ―第11話 酢屋到着

固まってしまっている陸奥らに、声が響いた。

「伊達どん。ここは西郷が一命を賭けて固め申す」

武士団の中から、ひとまわり大きい体が立ち上がって、突き出した。陸奥は顔に血液が戻って来るのを感じた。

「西郷さん。薩摩藩邸は？…大丈夫なんですか？」

「心配は要りもはん。すべては、この西郷が収め申す。中岡どんと雨谷どん三上どんも居られ申す」

陸奥は武士団の奥に、3人を確認した。さらに、高台寺党の一団も見えた。

半時（一時間）程して、空から白い雲を引いて青い光が落ちて来た。スッパン。

水柱を上げて、舟入に突入した。浮いて来た所に、舟が漕ぎ寄せる。次々と水の中から引き抜かれて、5人が出て来た。海援隊も薩摩兵も高台寺党も5人の妙な服装に、不思議な気分させられていた。アメンテイテイは、その中から才谷梅太郎をまず見つけ、そして自分の姉を見つけた。

「姉さん！。なんで？」

ミリテイ姉さんは、髪から水を滴らせながら憤慨ふんがいした。

「何でつて…弟の起こした騒ぎを、見て見ぬ振りができますか？。身重のホテイオティを心配させて。何なのこれは？」

星岡は、自分が弁護しなければと思った。

「ミリティさん。8440名の命がこれで救われるんです。分かってやって下さい。その中には、理香子の先祖も居るんです」

「どうして？救われるのです？」

理香子がずぶ濡れの髪を顔に貼り付けて言った。

「根拠は有ります。今日は慶應3年の11月16日：翌年の1月1日から起こる鳥羽伏見の戦いは、王政復古の会議で將軍慶喜不在で会議を行うのは違つと、山内容堂公が発言したのが原因で起きました。朝廷がならば將軍慶喜を京に呼べと言つ話になつたからです。

將軍が京に動くとなればその前に、幕府軍が京に動きます。動いて京の薩摩兵に接近して戦端が開いたんです。それは、才谷さんが後藤象二郎さんを通して、山内容堂公に働きかければ防げます。実際、そうされますよね？。才谷さん？」

「それは道理じゃ」

才谷も水を垂らしながらうなづいた。

その才谷を見て、中岡が声を掛ける。

「才谷。おまんその格好は何じゃ？。変ぞ」

フリースにジーンズにスニーカー。時代劇ならカットになる。

「140年後の着物ぜよ。これは離れた場所と話が出来る機械じゃ。最新の完全防水ぞ」

水に浸かった携帯を才谷は取り出して見せた。もちろん、電話会社の無いこの時代に使えないが…。得意気なずぶ濡れの隊長を見かねて、陸奥が言った。

「隊長。とにかく、中に入って着替えて下さい」

しかし才谷は西郷に気付いた。

「みんなは先に入つちよつてくれ。わしは西郷さんに礼を言わねばならん」

星岡も理香子も久利坂も、ひときわ大きい体の男を見た。西郷の写

真は無い。西郷の写真と一般に思われているのは、想像して描かれた絵である。

絵と違って、それ程目が大きい訳ではない。普通に有る顔だが、この時代の人々より全てがひとまわり大きい。そして微動だにしないオーラを放っている。

「礼は要り申さん」

低い良く響く声で西郷は言った。

理香子は感動して、目が潤んでいる。西郷もこの数年後に、西南戦争と言う悲劇の中で自害する。その西南戦争も謎に満ちている。坂本龍馬の死後は、佐賀の乱や大久保利通の暗殺など、異説が乱れ飛ぶ不明瞭な時代に突入してゆく。

しかし、11月16日に彼はまだ生きている。国家間の紛争はなくならない。しかしそれが武力衝突で負けた方が、無条件で全てを受け入れる結末…解決では無い…そんな結末の無い世界を、才谷梅太郎が出現させられるかもしれない。そう理香子は思った。

星岡に促されて、理香子は（木工品の店ではなく）材木屋の酢屋に入った。これは、カビ臭い文献資料ではなく、現在進行形の慶應3年11月16日だ。そして、知っている史実とは違う歴史を刻み始めている。だが、才谷梅太郎こと坂本龍馬の命を狙っている黒幕は不明のままだ。

「中岡さん？ですね」

白黒写真で見た中岡慎太郎が目の前に居る。

「ん？。そうじゃが？。あんたは？」

「遠藤理香子と云います。140年後で歴史学者をしています。才谷さんは誰に襲われたんですか？」

「おなごの学者か…こん国の明日は開けちよるの…襲ったは谷干城<sup>たにかてき</sup>。

毛利恭介。田中光顕。白峰駿馬じゃ」

理香子はシヨックに襲われた。

「全部土佐藩士じゃないですか？。しかも谷は陸援隊。駿馬は海援隊。黒幕がいますね」

今度は中岡が驚いた。

「そんな詳しく、何で知つちよる？」

「140年後の世界では、その4人は暗殺後に菊屋峰吉に通報されて、最初に現場に駆けつけた。いわゆる第1発見者になってます。

黒幕がいるはずです。彼らを挑発した人物が」

中岡はうなづいて言った。

「エゲレス公使館の通訳じゃ。おそらく殺せとは言うちよらん。言うちよらんが、武力倒幕をしようちゆう連中に才谷は幕府の手先じやと言えば同じじや。この通訳は、西郷が言う事を聞かんは龍馬のせいじやと思うちよるのよ。まあそんな所も無くもないが…」

理香子はある名前を思い出した。

「アーネスト サトウ？」

理香子は、いわゆる彼の日記を読んだ事がある。加えて、イギリス公使だったヘンリーパークスらの半交信フライベートルターについても研究していた。半交信は、公文書として議会上に提出義務が無い為に、公文書には無い記述が記されている。イギリス公使館の意図に対して、坂本龍馬が障害だったならば、彼らが黒幕として情報操作をする事は有り得る。暗殺が失敗なら、公使館は次の手を打ってくるはずだ。

「サトウを知つちよるか？」

「大体の履歴は知ってます。問題は…サトウは、野口富蔵のぐちみそらうと云う腕の立つ従者を抱えています」

「流言飛語で上手くいかんとなれば、刺客を送るとでも？」

「わかりません。でも警戒する必要は有ると思います」

中岡はうなづいた。

横に居た久利坂が中岡に言った。

「中岡さん。私は久利坂と言います。刀を頂きたい。居合い抜きを

やってみして、坂本さんの護衛を務めたい」

「都合しよう。試しにこれで、太刀筋を拝見したい」

中岡は、自分の刀を腰から外して、鞘ごと久利坂に投げた。鞘に入ったままの日本刀を、左手でつかんだ瞬間。

どうやったのか刀は鞘から抜けていて、切っ先が中岡の鼻先をかすめた。そして、久利坂は刀身を立てて眺めた。

「見事な刃紋…銘は？」

「信國在銘。言う程の物ではござらん。見事な居合い、感服しました」

久利坂は、刀を鞘に収めて中岡に返した。

星岡は久利坂のしたたかさを感じた。この時代、刀を持った人々の心をつかむには、剣の腕前程ものを言う物は無い。久利坂は人を斬った事は無いはずだが、中岡の口から久利坂の名前は広まり、彼に対する者は斬り合いを避けるはずだ。坂本龍馬の護衛は、それだけでも成り立つ。

星岡 理香子 久利坂、アメンテイテイ姉弟、龍馬と中岡…そして陸奥が酢屋の2階に入った。残りの海援隊と高台寺党、西郷は外を固めている。陸奥が状況を一同に説明した。さすがの龍馬もぶ然とした。

「陸奥。藤吉は、斬られてしもうたか？」

「近江屋新助によると、本屋の峰吉が上手く逃してかくまっています」

藤吉は、元力士で龍馬のボディガードだった。定説では、龍馬と共に斬られて絶命している。

「生きちよるか！」

龍馬は嬉しそうな顔で笑って言った。

「…ここは。三人共に死んだ事にするぜよ」

中岡が龍馬を睨んだ。

龍馬も睨み返した。

「中岡。谷達がわしらを襲ったつちゆう事になったら、土佐は分裂するぜよ。武力倒幕派と海援隊派とに。そんな内輪もめをやっちょる時じゃ無いきの」

中岡が言う。

「確かに。なら、黙って葬式をやらせるのか？」

「そうじゃ。海援隊と陸援隊で棺を担げ。谷らの芝居に乗ってやれ。棺を落とすな。中身をぶちまけんように気いつけよ」

陸奥がうなづいた。

「以後。隊長と中岡さんは死んだ事になります…」

「死んだ。わしや今日から島田清八郎じゃ」

「ならば中岡慎太郎は、桜井隼太と名乗ろう」

理香子はその名前に覚えが有った。明治元年に、土佐藩が新政府に命じられて四国平定に出動する。長岡謙吉が新海援隊を結成して小豆島占領に向かっている。その名簿に、この2つの名前が有る。史実でも2人は死んでいないかもしれない…理香子は思った。

「雨谷さん。どうする？」

龍馬がアメンティテイに言った。

「私が知っている歴史では…これから、戊辰戦争が始まります。我々が居なくても、龍馬さんが生きていれば戦争は起こらないでしょう。なら、私達は自分達の時代に戻るべきだと思います」

「高台寺からか？」

「はい」

「ちくと大人数じゃ…目立つな」

龍馬はニヤリとした。

「良い手が有るぜよ」

―次話！

―第12話近江屋新助

高台寺に行く為に、龍馬が考えた秘策とは？理香子は夢にまで見た慶應3年の河原町を歩く！

## ―第12話近江屋新助

### ―第12話近江屋新助

11月17日になった。

陸奥は、谷達がやっている芝居の進行状況を知らせに來た。重症だったと云う中岡慎太郎が絶命したと云う話になった。明日の18日に近江屋で葬儀が行われ、夜に棺を高台寺鷲尾山に埋葬すると言った段取りになっているらしい。

西郷は今日も酢屋の前から動かない。何人が酢屋の様子を窺うかがいに來たが、前の路地を封鎖しているので入る事が出来ない。

龍馬は、酢屋嘉兵衛に近江屋新助を呼ぶように頼んだ。娘の千代が使いに出たが、中にはやはり入れなかつた。しかし話は通じて、近江屋新助は酢屋にやつて來た。

2階が上がって、新助は腰を抜かした。

「才谷さんに石川さん？。これはいつたい？…」

近江屋新助自身も事の真相は知らされていなかった。いきなり棺が持ち込まれて、葬式をやると土佐藩邸から言い渡されているだけだった。

「…死んだと聞きましたが。いつたい？」

龍馬がうるたえている新助を面白そうに言った。

「新助。芝居じゃ。わしらは、おまんの家の2階で新撰組に斬られた。谷の台本通りにやつちよければ良い」

「うちで斬られた事になってるんどすか？。どおりで、2階の掛け

軸に鶏の血しぶきを付けたり、血溜まりを作ったり…それでワケがわかりましたわ」

「アホウじゃ。じゃが、アホウに付き合わんと命が無いぞ新助」

「わかつております」

「そこでじゃ。空の棺が3つ有るじゃろう？」

「はい」

「こん人達を入れて、高台寺に運ぶ」

新助は奇妙な5人を見た。2人は天竺あたりの異人に見えた。

「無理でございましょう。棺の周りは土佐藩士がおられます。棺に近付くのも容易ではございません」

「棺はどこに有る？」

「2階の奥八畳に…」

「アホウじゃな。出棺せんにならんのに、2階から階段を降ろすつもりか。中身を隠そうちゆう魂胆こんたんが見え見えぜよ」

「それが故に近付けません」

龍馬はニヤリと笑った。

「いや。奥八畳なら、井筒屋の屋根から物干し台に入り、そこから入れる」

「棺の周りの人払いは？」

「西郷に頼む。井筒屋と裏の寺に話をつけよ」

龍馬と中岡は、当然動けない。星岡 理香子 アメンテイテイ、ミリテイ姉さん 久利坂は海援隊士の姿になった。久利坂は、中岡から刀を調達してもらった。土佐の無名の刀鍛冶のひと振りだったが、物は確かだと久利坂は言った。久利坂以外は、柄つかと鞘だけの木刀だ。

18日の昼過ぎに、海援隊士の中に紛れて酔屋を出た。

舟入の向こうは、彦根藩邸だと理香子は思った。西に向かい河原町

の本通りに出る。出ると三条通りに向かって北上する。

「…ここは誓願寺。あれは天性寺。」

星岡は、尊皇の志士に扮している理香子を見た。

「まるで近所のような。ここは理香子の故郷って事か」

「そう。私はもう何年も…ここに住んでるの。わかる？」

「わかるよ。お前の彼氏をやっつてんだぜ。俺は」

「ありがとう」

周りには、写真でしか知らなかった若者達が居る。先頭の陸奥陽之助は農商務大臣 外務大臣を務め伯爵となる。カミソリ陸奥と呼ばれ、不平等条約治外法権を改正する。その後ろの山本龍二は福島県知事 山形県知事 貴族院議員になり男爵だ。右横に居る千屋寅之助は海軍小佐になり福島県安積原野を開拓する。左は高松太郎、坂本家が再興された時に当主となる坂本直だ。函館裁判所判事 宮内省舎人を務めた。

誓願寺を回り込み、南に向かって蛸薬師の前を通る。そして路地を東に入り、さらに南に折れる。

寺の門を陸奥が叩くとゆっくり門が開いた。出て来た坊主は何も言わず、一同を招き入れた。

「この寺は井筒屋の真裏ね…」

理香子はつぶやいた。

―次話！

―第13話待ち伏せ

井筒屋の屋根から近江屋2階の物干し台へ…。何かを感じた久利坂が慎重に近付くが…。理香子に絶体絶命の危機が迫る！



## ―第13話待ち伏せ

### ―第13話待ち伏せ

日は完全に暮れた。

寺の中を抜けて、墓地に入る。右手に近江屋の土蔵が見える。

「隣の井筒屋とは話がつけてあります。こっちに…」

陸奥以外の海援隊士は残り、陸奥を先頭に星岡達がついて行く。井筒屋の裏に出た。陸奥が母屋おもやの裏戸を叩いた。静かに裏戸が開いて、井筒屋の主人とおぼしき人物が手招きした。

「私は残ります。後は井筒屋に頼んでありますから…」

陸奥は残って、アメントイティを先頭に久利坂が最後に入って戸を閉めた。燭台の灯りを頼りに階段を上がり、2階に出る。そこから物干し台に出た。井筒屋は手で方向を示した。

「あれが近江屋さんの物干し台どす」

中からボンヤリと灯りが洩れている。うなづいたアメントイティが物干し台の柵を越えて、屋根瓦の上に立った。

そのアメントイティを、久利坂が手で制した。

「どうしました？」

久利坂は、唇に人差し指を当てて、黙るように合図した。

アメントイティを押し留めたまま、久利坂は屋根の上に降りた。そして、刀の鯉口こいくちを切つて、ゆっくりと近江屋の物干し台に近付いて行く。

その頃。

近江屋の正面前に、一人大男が現れた。

「何者か？」

戸の前の番人役が誰何すいかした。

「薩摩の西郷吉之助でござす。坂本先生の葬儀ば、ここでござすか？」

「さつ薩摩の西郷……」

うるたえた番人役は、戸の中に向かって誰かを呼んだ。出て来たのは、田中光顕。

「田中さあでござすか。坂本先生のご遺骸、別ればあ告げ申す」  
それだけ言つて、西郷は黙った。田中は完全にパニックした。

「西郷殿。申し訳ないが、それは出来よらん」  
だが西郷は黙っている。

「……お引き取り願いたい」

西郷は口を開いた。

「どんお方が出来んと申してござす？。田中さあでござすか？」

「わつわしではない」

「では。申しておわす御人を出されよ」

「よしっ分かつた」

田中は引つ込んで、中がざわついた。

一向に、誰も出て来ない。

西郷はアツサリ戸をくぐつてしまう。中で言い合いをしている田中  
谷 毛利が

「あつ！」

と叫んだが、西郷は止まらない。

「西郷殿！西郷殿！待たれよ！」

口々に叫ぶが、誰も止められない。  
2階に通じる階段の下で、西郷は止まった。これが手筈<sup>てはず</sup>だった。2階からも人が降りて来て、押し留めようとする。2階は無<sup>な</sup>人になった。

久利坂は、ゆつくりと物干し台に上がり、そこから近江屋の2階奥八畳間の様子をうかがった。  
棺が3つ置かれて、何本か蠟燭<sup>ろうそく</sup>が立てられている。

…中は結構明るい。

久利坂は、後ろに来るように合図した。しかし、久利坂は何か気に入らなかつた。嫌な気配がする。こういう時には、90%の確率でズドンと来る…。

星岡達が物干し台に上がって来た。

久利坂は、もう一度ゆつくり部屋の中を眺め渡した。血しぶきの掛かつた掛け軸は外されている。床の間の壁には、掛け軸を外れた血しぶきが残っている。部屋<sup>むま</sup>の脇には火鉢<sup>ひばち</sup>…その横には、鞘<sup>さや</sup>の割れた日本刀。一緒に有るのは犯人の名刺か?。芝居の小道具は揃<sup>そろ</sup>っている。

視線を棺に戻す。久利坂の視線が止まった。一番遠い棺<sup>ひた</sup>の蓋<sup>ふた</sup>が、わずかにズレている。物干し台に有った空の植木鉢を、そつと拾い上げると…久利坂は棺に向かつて放り投げた。

棺に落ちて碎けるはずだが…空中で棺から伸びて来た腕で、植木鉢はキャッチされて、投げ返された。久利坂は居合いで鉢を割つたが、その鉢の破片の向こうから、人が突進してきた。

刀は振り切られていて、切り返す事が出来ない。その隙間<sup>すきま</sup>を抜けて、男は星岡と理香子の間に突入した。

そして、凄まじい引きで理香子の襟<sup>えり</sup>をつかむと、理香子ごと飛び退<sup>ひ</sup>がった。ようやく切り返した久利坂の切っ先が、男の腕を払った。

袖を斬ったが：男にキズはない。

男は、理香子を後ろから抱きかかえるようにして、刀を首筋に当てている。久利坂はすでに刀を収めて、次の間合いを図っていた。

男と久利坂はにらみ合いになった。燭台しよくたいに照らされて、男の顔が見えた。

「おまえ…。野口か？。野口だな？。サトウの従者の野口だな？」

久利坂が言った。理香子は抱きかかえられている為に、顔は見えない。反射的に顔を見ようとしたが、完全にキメられているので微動だに出来ない。

アーネスト サトウの日本人従者野口富蔵のりくちとみぞうは、写真が残っている。

彼は、アーネスト サトウが東海道の宿で襲われた際に、見事に刺客を撃退している。

「何故知っている？」

「サトウと写っている記念写真を見た」

野口は多少うろたえた。

「：何者だ。坊主？」

久利坂のスキンヘッドは、この時代なら坊主と呼ばれても不思議ではない。

「野口富蔵！。その人を離せ」

久利坂は必用ひつように名前を言った。刃物を持った相手の扱いは、久利坂の本職だ。

その微妙な空気の中に、西郷が（引き留める土佐藩士を袖にぶら下げて）上がって来た。

上がって来た全員が、そこに展開している光景に見入った。

退路を断たれたと思った野口は、理香子を盾に物干し台に突撃した。西郷が無謀にも後ろから追って、野口の刀の柄を後ろからつかんで

モギ取った。しかし野口は、理香子を離さずに、脇差しを抜いて、久利坂の居合い抜きを受けて払った。火花が散り、野口の脇差しは半分から折れて、壁に突き刺さる。星岡が中身が木刀の偽刀を、鞘ごと野口に振り降ろす。頭上で野口は、左腕でそれを受けて、すり抜けた。

なすすべも無く、野口は屋根に飛び移って走ってゆく。

星岡と久利坂がその後を追ったが……。積んで有った箱に飛び降りてそのまま河原町本通りを「ええじゃないか」と踊りながら練り歩く行列の中に見失った。

その喧騒けんそつの中、星岡は道に座り込んで、弾む息の間から唸うなった。

「人ひとり抱えて。あの走り。しかも屋根の上……。化け物か！」

それに答えるように、久利坂は言った。

「人質にするつもりだ。それなら危害を加えられる事は無い。しかし。アーネスト サトウ……。喰えん奴らしい」

星岡と久利坂は、明け方まで理香子を求めて、京の街をさまよった。

―次話！

―第14話搜索

理香子の行方を求めて、星岡と久利坂は京の街を探し歩く。一方、酢屋の龍馬にサトウから書状が……。そこに書かれていたのは？。

## ―第14話捜索

### ―第14話捜索

近江屋の2階は、西郷が収めた。<sup>おん</sup>

星岡 久利坂 アメンティティ ミリティ姉さんの4人は、酢屋に引き下がるおえなかつた。葬儀自体は、予定通り行われ空の棺が11月18日の深夜、海援隊と陸援隊によって、高台寺に埋められた。この棺が明治以降に調査されたら、遺体が無いと云う展開になるんだろう…と星岡は推測した。

龍馬は、英語の分かる隊士をすぐに、神戸のアメリカ公使館に走らせた。

「星岡さん。メリケンに抗議させるきに」

「なんとかかりますか？」

「心配いらんぜよ。すぐに理香子さんは戻る」

龍馬は笑って見せた。

そこに、階下から上がって来る音がする。酢屋の主人嘉兵衛だ。

「才谷さん。来ましたよ。おそらく…」

嘉兵衛は手紙を龍馬に差し出した。封を切って、巻紙をパツと広げる。

星岡の見た所、見事な毛筆の書体で、線がのた打っているようにしか見えなかつた。

「サトウからぜよ」

龍馬は、差出人の名前を指差して言った。アーネスト サトウは毛

筆で候文こうぶんが書けた事が知られている。

「本人が記名で」

「間違いない。この威張りくさった文句は、イカルス号の時のサトウの言いぐさと同じぜよ」

「何と言つて来てる？」

「わしのやる事が気に食わん言うちよる。取引したいきに、12月7日五つ半に油小路花屋町の天満屋にひとりで来い言うちよる」

久利坂が静かに一言を差し入れた。

「待ち伏せて、殺す気だ」

「じゃが、行かねば理香子さんは助からん。行くぜよ」

星岡は慌あわてた。

「才谷さん。あなたが死んだら意味が無い。俺が身代わりで行く」  
才谷は、もの凄い力で星岡の肩をどやしつけた。

「惚れちよるかあ？。星岡さん、目が本気ぜよ！」

星岡は痛む肩を押さえながら言った。

「理香子が戻らなかつたら、俺も戻らない」

才谷は、星岡の目をしばらく見つめていた。

「分かった。何か策を考えよう」

龍馬と中岡は、公には死んだ事になっている。幕府大目付の永井尚志が、新撰組の近藤勇を尋問した：と云う噂を千代が持つて来た。12月6日には、神戸と新潟が開港し大阪は開市された。開市と云うのは、それまで外国人は大阪の町に入れなかつたが、入れるようになったと云う意味だ。

この日に、後藤象二郎が酔屋にやって来た。星岡は久利坂と理香子の捜索に出て居ない。彼は龍馬と中岡の上司に当たる。実際には身分の関係で、藩の重役や山内容堂公との繋ぎ役でしかない。龍馬や中岡は直接会う事が出来ないからだ。

「坂本。王政復古令に徳川慶喜の名前が無いが為に、殿が暴れるぞ」  
明治新政府の人事リストの事を、後藤は言っている。

「暴れるとは何ぜよ」

「慶喜は朝議には出られん。出れば一緒に幕軍が動いて戦になる。しかし容堂公（土佐藩主）は朝議に参加した上で決するべきだと言うちよる。おそらく、王政復古令の文書に判を押すのを拒否する。

拒否すれば、朝議は慶喜を呼べと言つ話になる。朝廷に呼ばれば、慶喜は京に居るしか無い。居れば戦じゃ」

龍馬は気の無い様子で答える。

「そこまでの話は、大目付永井と打ち合わせちよる。將軍は、王政復古令に何が書かれて有つても、二条城から一兵も外に出さん。いよいよとなれば、大阪城に下る。その後は、頃合いを見計らつて、船で江戸に戻る事になつちよる」

後藤はなる程とうなずいた。

「將軍が京からも大阪からも退けば、幕軍は戦えない。薩摩も戦つ名目が無くなる。しかし、そうすなりと退かせてくれるか？」

「早ければ早い程うまく行く。遅れば戦になる。永井にもそう念を押した。…時に」

龍馬は言葉を切った。

「…理香子さんの搜索の件は、どうなつちよりますか？」

「うむ…」

後藤は声を低くして、顔を近付けて来た。

「英国軍艦アドベンチャー号。大阪湾天保山沖に浮かんじよる」

「海の上か…。ファンケル バーグも判らん事が、ようわかつたな？」

「それじゃ。天保山沖の夕霧の甲板に、投げ込まれちよつた。これは一体何ぜよ」

後藤は懐から、四角い物を取り出した。ちなみに、夕霧は土佐藩所有の船だ。

龍馬は、それがすぐ携帯電話だと分かつた。二つ折りの携帯を開く

と、まだバッテリーが残っていて、画面に文字が有った。

りかこ あどベンチャーごう とさ さいたにさまに ぶじ しん  
ばいばい

「理香子さん。ただ者ではないぜよ。アドベンチャー号と、夕霧を見分けたとは…。こりゃあ星岡さんに見せねばならん」

龍馬はバッテリーを保たせる為に、電源を切った。

「龍馬。それは何ぜよ？」

「携帯電話ぜよ」

「何をする？」

「手紙みたいなもんじゃ」

後藤は理解出来なかったが、理解する振りをした。

星岡は連日、理香子の消息を求めて、久利坂と京の町を歩き回っていた。星岡は髪が長かったので、そのまま鬘まげを結ってもらった。久利坂はスキンヘッドのまま、ヤクザ者のように見えた。2人で歩く、若侍と用心棒のように見える。

理香子の言ったように、高瀬川は川幅も広く高い土手に挟まれていた。そして、多くの高瀬舟がひっきりなしに往来おつらいしている。あの日、用水路になった高瀬川を見つめていた理香子の横顔を、星岡は思い出していた。ここは、言葉も気持ちも通じるが、明らかに異国だ。自分達の世界では無かった。人々は懸命に生きている。彼らの生き方の先に、140年の先に自分達の世界が有る。戻りたいと星岡は願った。理香子と共に…。

気付くと、高瀬川沿いから遙か四条通りの薩摩屋敷まで来ていた。

今出川の二本松で聞いた話で、あの夜侍姿の女を抱えた男が、この薩摩屋敷辺りを走っていったと云うのだ。

「ここに居るなら、西郷さんが教えてくれるはずですよね？。久利坂さん？」

「おそらくもう：居ない可能性が高い。大阪の領事館に逃げ込んでいるかもしれません」

「でも、天満屋に理香子を連れて来るなら、大阪まで行きますか？」

「西郷が我々の側なら、大阪まで行くしかないでしょう：もしかしたら、大阪湾の軍艦の上かもしれません」

久利坂は言葉を切つて、視線を走らせた。

「見なさい。西郷は私達に護衛を付けてくれている」

視線の先の四つ角に居た男がスツと消えた。

「西郷さんは大丈夫なんですか。俺達に味方して？」

久利坂は星岡を促して、酢屋方向に戻り始めた。もう日が傾きかけている。

「西郷が正しいと言えば、それは正しい。薩摩の人間にとって。西南戦争では、誰もが西郷の為に喜んで死んでいった。まあ出来れば、西郷には別の道を選んで欲しかったがね」

星岡は眉間にシワを寄せた。

「征韓論も西南戦争も、なんでそうなるんだろうって思いますよ。

ワケが分からない」

「いろんな説が有る。謀略ではめられた。内乱になりかねない不平士族を、自分が共に死ぬ事で収めたとも言つ。西郷は参謀を、誰も薩摩に連れて行かなかった。桐野利秋きりのとしあきだけを連れて行った。勝つつもりは無いと云うか：負ける為に西南戦争を起こしたとも」

「久利坂さんは、どう考えます？」

「わからん。だが西郷は、人の心を最も尊重する人だ。西南戦争は士族達が望んだ。だから、彼らの望みをかなえてやったんだろう。

西郷は優し過ぎたのさ。士族達の痛みが分かるが為に、彼らの死に場所を作つてやったんだろう」

星岡は嫌な顔をした。久利坂は、それを見てニヤツと笑った。

「久利坂さん。俺はそれには同意出来ません」

「ほう？」

「生きてこそ人でしよう。生かしてこそ人じゃないですか」

「そうだ。西郷が冷酷なら、生かしただろう。生き生かすと云うのは…冷酷な事なんだよ、星岡さん。ちなみに、謀略説を覚えておきましょう。西郷は、イギリスのコントロール下に有った明治政府を、アメリカを後ろ盾にして脱しようとした。坂本龍馬のように…。謀殺されかけた西郷を土族達が守る為に西南戦争が起こった。征韓論は後付けの理由だから、話がおかしいのだとね。今の西郷に聞いても分かん話だが…知りたいものだな」

星岡は首を振って、黙った。

2人は戻った酢屋で、理香子がアドベンチャー号に居る事を知らされた。

―次話！

―第15話天満屋

サトウが待ち受ける天満屋に踏み込む龍馬…スミス アンド ウェッソン1/2ピストルの合図で海援隊と星岡 久利坂が天満屋に突入するはずだったが…。理香子は果たして？。

## Ⅰ 第15話 天満屋

### Ⅰ 第15話 天満屋

12月7日になった。

史実では、海援隊が犯人だと勘違いして、16名で三浦休太郎を天満屋に襲撃した。さらに兵庫が開港している。

天満屋は、現在の住所で云うと、下京区仏具屋町油小路通。西本願寺と東本願寺の間になる。この時に死亡した海援隊士中井正（庄）五郎の碑が有る場所になる。

しかし、星岡は油小路花屋町だと龍馬に言われた。実は、理香子との京都旅行で、この天満屋跡にも立ち寄っている。ガイドブックに仏具屋町と有るのを、星岡は覚えていた。

「天満屋は、花屋町にも仏具屋町にも入口がある。どっちも正しい。つまり、角地に立つちよるのよ。」

龍馬は、高瀬舟で星岡と久利坂に船首から言った。高瀬川を七条通りで降りて、西に向かつてゆく。東本願寺の南を通り、西洞院を過ぎて2本目の米屋町で北に曲がる。玉光町を越えると仏具屋町になる。星岡と久利坂は、玉光町の角で止まって龍馬を見送った。さらに北側の角に、海援隊士8名が見える。別に8名が仏具屋町の角を曲がった花屋町に待機しているはずだ。時刻は5時半。夜9時頃になる。

龍馬は、天満屋の文字が入った行灯あんどんから中に消えた。龍馬の持っているスミスアンドウェッソン1/2ピストルの合図で、全員が踏み

込む段取りになっている。

町家の軒下まちげに居る星岡もピストルを持っていた。日本刀はとても使えない。

舟の中で

「人は撃てない」

と言うと龍馬は笑った。

「こけおどしよ。構えるだけで、相手は近づくのをおためらう。それでも来そうになったら天井を撃て。撃ったら逃げよ。武器は人を脅す為に使うのが良い。殺す為に使ったら、終わりのない報復合戦になる」

待ちながら、星岡は上手い事うまいを言うと思った。なかなかピストルの音がしない。

北側の海援隊がジレて、天満屋の入口まで動いた。そこにノツソリ龍馬が顔を出した。

「おまんらあピストルは撃つちよらんぜよ」

と言うのが聞こえる。顔がこつちを向いた。

「星岡さん」

と龍馬は呼んだ。星岡は久利坂と共に、天満屋の入口に向かった。

「どうしました？。才谷さん」

「おまんの想い人はなかなかなげよ。エゲレス人を説き伏せよった」

まあ入れ。久利坂さんも。後は残れ」

星岡と久利坂だけを連れて、天満屋の中に入った。

2階に上がって、奥の部屋に進んで行く。襖ふすまを開けると、灯りに照らされてイギリス人と野口が居た。久利坂は脇差しの柄を握り、星岡は懐ふくろのピストルをつかんだ。

龍馬はドカッと畳に座り、入口で殺気立っている2人を促した。

「やめちよけ。そりゃあ要らん事ぜよ。こん人は、エゲレス公使館の通訳サトウさん。こっちは従者の野口さんじゃ」

若いイギリス紳士が椅子から立ち上がった。

「サトウと申す」

ちゃんとしたイントネーションで、このイギリス人は日本語を発した。野口は軽く目礼する。

「こちらは、星岡さんに久利坂さん」

こちらにも目礼する。

「座れ。2人とも武器から手を話せ」

龍馬に言われて、2人はゆっくりと座った。

サトウは笑みを浮かべて言った。

「星岡さん。遠藤さんは素晴らしい方ですな。このサトウ目が覚め申した」

星岡は展開が飲み込めずに、久利坂と目を合わせた。

「遠藤理香子が何を？」

「不審はごもつともござる。このサトウ、武力を用いてしかこの国は変えられん思っております。たが為薩摩に武力革命を説いて参りました。更には、その妨げとなる才谷くわたさんの殺害も企て申した。恥ずかしい限りでござる。薩摩と幕府の戦は、無謀どころか必要ですら無い事を遠藤さんに教えられ申した。まったくその通りと目が覚めた次第です」

サトウは椅子の上で深々と頭を下げた。頭を上げると続けて言った。「…しかしながら。当公使館の方針は決つてしまつております」

アーネスト サトウは間を開けた

「どう決つしてるんです？」

星岡は促した。

「薩摩 長州に武力倒幕を行わせ、新政府をイギリス本国に承認させる。…つまり、戦うなどイギリス公使館は言えない状況に有ります。ヘンリー パークス公使は、大阪湾に艦隊を集結させて、幕府軍が江戸に退去する事を認めないと、非公式に將軍に通告する予定です。もし、將軍が退去するならば、幕府の船舶を沈める事も辞さない事も含めて」

星岡は、この恫喝どっかつにさすがに頭にきた。

「そんな無茶な！ イギリス紳士が聞いて呆れる。そんな事したら、あんたも公使も首でしょうが？ 武力介入は、イギリス議事に禁じられてるって、理香子に聞きましたよ！」

サトウは眉毛ひとつ動かさない。

「武力介入で無いなら？。どうです？」

「……………」

「イギリス人居留地きょりゅうちに、戦争の被害が及んだ為に、イギリス人保護の為に報告するならどうです？。もはや、その計画でイギリス公使館は動いています。私には止められません。なにしろ、私自身がこの計画を昨日まで、推し進めて来た張本人ですから」

星岡はあきらめて、質問を変えた。

「理香子は今、どこに居るんです？」

「アドベンチャー号です。私は理香子さんをお戻しするつもりでしたが、理香子さんに拒否されて困っています」

「待てよ。なんで、そうなるんだよ！」

「つまり。パークス公使を説得するとおっしゃるのですが…それは危険ですよと留めました。パークスは誇り高い。女性に説得されるなど、最も嫌う人物です。今日ここにお連れするつもりでしたが、パークスに会わせなければ動かないと言われまして、この有り様です」

星岡は天を仰いだ。

「何考えてるんだよ。あの馬鹿……」

「星岡さんは、理香子さんの許嫁いいなすけで有られるとか？」

「まあ、そうですね」

「説得する為に、アドベンチャー号に来て頂けませんか？」

「行きましよう。アドベンチャーワールドだろうが、ファンタジーだろうが」

「星岡さんは詩人で有られる！。まさに、幻想的冒険です。すぐにも出ましよう」

天満屋の花屋町側に、駕籠かしょが2つ呼ばれた。

裏階段から降りて、サトウと星岡が乗り、野口と久利坂が駕籠の横を歩く。この時期、京に外国人が入る事は許されていない。見つければサトウの命は無い。天満屋は、どうやらイギリス公使館のコントロール下に有るようだった。しかしながら、天満屋には新撰組から幕府関係の人物まで宿泊している。別れ際そう言った事情も含めて、龍馬は星岡に言った。

「サトウは無茶ぜよ。だが理香子さんのおかげで、頼もしい味方になった。信頼して良い」

駕籠は大阪に入るまで、走り続けた。大阪湾天保山沖に着いたのは、12月8日の朝だった。

「次話！

「第16話アドベンチャー号 2009年に帰ろう！。理香子を説得する星岡。しかし、夢にまで見た幕末の中で、パークス公使に想

いを伝えたい理香子だったが…。

## ―第16話アドベンチャー号

### ―第16話アドベンチャー号

アドベンチャー号は1794トン スクリュー船で、砲数2の兵員輸送船と記録されている。もちろん、星岡も久利坂にもそこまでは分らない。上陸用の汽船に乗り換えて、アドベンチャー号に乗り移った。イギリス水兵が、サトウを先頭に乗り込んで来る4人を眺めている。

蒸気機関で木造船が、スエズ運河も無い時代に日本までやって来ている。時間は掛かるにせよ、すでに世界は繋がり始めている。

サトウについて行くと、階段を降りて士官用の個室に案内された。

ドアの向こうで、机に向かっていた理香子が振り返った。

「ユキヒロ！久利坂さんも！」

人質だったはずが…見事にVIPになっている。

「理香子！。いったい何がどうなってるんだ？。ケガは無いのか？」

理香子は袖からヒジを出すと赤く擦りむいていた。

「多少、さらわれた時にあちこち痛かったけど。ほぼ大丈夫」

理香子は笑って見せた。

「すぐに戻ろう。坂本龍馬は生きている。もうここにいる理由は無い」

理香子は口をとがらせた。

「ダメよ！。パークスを説得する！。サトウさんは理解してくれた！」

「それは、理香子がしちやいけない。この時代の人々なら構わない。龍馬さんがやるのなら良い。彼は今も生きている。失敗するかもしれないけど、この時代の人間の権利だ。サトウさんに聞いたけど、パークス公使はプライドの高い人物らしい…一度決定した事を覆したりしないと思う。だいたい、身元の分からない女に会うと思うか？」

「でも会えれば、艦隊が開陽丸を威嚇いかくするのを、やめさせられる」  
星岡は眉を寄せた。

「開陽丸って何だ？」

「將軍慶喜が使ってる船。イギリス艦隊は、開陽丸が大阪湾に入れないようにしてる。サトウさんによれば…公使館は大阪の街に噂を流してる。開陽丸が大阪湾から將軍を乗せて出ようとすれば…」

「すれば？」

「將軍もろとも沈めらるって」

星岡はゾツとした。居留地保護の為の流れ弾が開陽丸に直撃する。誤爆で、チャウシエスクの子供をかくまった中国大使館が吹き飛んだ事件を星岡は思い出していた。

「龍馬さんがアメリカ公使に掛け合っている。そっちの結果に任せの方がいいよ」

「ファンケル バーグ アメリカ公使ね…。米艦イロクオス。この軍艦が大阪湾に来るのは、1月6日…鳥羽伏見の戦いが終わったあと。遅すぎるの！」

黙っていた久利坂が口を開いた。

「それは、坂本龍馬が殺されたからだ。この世界で彼は生きている。すでに將軍脱出の手はずを整えているよ。彼は」

星岡はもう一度言った。

「京に戻るう。戻って、2009年に帰ろう。坂本龍馬が暗殺されてなければ、帰っても大丈夫だ」

理香子は間を開けた。ゆつくりと船内を見渡した。

「この船は、アドベンチャー号。兵員輸送船で砲数2のスクリーパー船。私達にはこれ以上の事は分からなかった。どんな外観で、中はどうなつてたか。内装は？。窓の形は？。床は？。乗り組んでいた人達の様子は？。ここに全部有る。欠落した慶應3年が全部そろつてる。ここは私の世界なの……」

星岡はため息をついて言った。

「わかってるよ。だけど、理香子は死ぬ所だった。アーネスト サトウの説得に失敗してたら……俺の大好きなフィアンセは、スミスアンドウエッソンか誰々作の日本刀で殺されてた。生きて帰つてこそ研究だろ！。正しい真実を世の中に伝えるまでが、歴史学者の仕事だろ！。パークスに会うのは、自己満足の為じゃないのかよ？。そうでなければ、こんなギャンブルは許されない。物理学者が原子炉の中に入ってゆくようなもんだ。頭を冷やせよ。理香子」

理香子は少し涙ぐんで星岡を見た。

「ごめん。ユキヒロ……わかった」

黙っていたサトウが立ち上がった。

「では。とりあえず。岸までお送りしましょう。野口を付けます。

野口に伏見まで送らせます」

サトウは船上から星岡達を見送った。

後ろで縛つた髪のおくれ毛が、風になびいている理香子の横顔を星岡は見ていた。もし、パークスの説得に理香子が成功していたら……この女性は歴史に名をとどめてしまう。この後140年の成り行きを知っている人間が、それをするのはフェアじゃない。逆に失敗すれば、意地になったパークスは開陽丸を即座に沈めるかもしれない。どちらもハッピーエンドとは言えない。ただ、そうしたい気持ちは理解できない訳ではない。

「何て言つてサトウを説得したんだ？」

理香子はおくれ毛を手で押さえて星岡を見た。その後ろでアドベンチャー号が徐々に遠ざかってゆく。

「戊辰戦争の戦死者8440名以上。負傷者5454人。銃を売った取引商会：シモウト、レーマン、ウォルシュ、ガリー、カールニツコル、クース、キニツフル、ヒューズ、ガイコシス、ボードイン、オールド、アデリアン、レインボールイス。1863年から1869年までに、516,844挺が輸入され、他にもアームストロング砲や軍艦。薩摩長州に武力倒幕を勧めるあなたが、この道義的責任をとれますか？…と聞いただけ」

星岡の横に居た久利坂がボソツと言った。

「恐ろしい事を言われますね。理香子さんは…」

理香子はアドベンチャー号を振り返って言った。

「事実だから言えます。どの戦争にも理由が有ります。でも責任を取った人物は誰ひとり居ません。責任をかぶせられて、処刑された人はいても」

汽船の舳先へんたいに座っていた野口が初めて口を開いた。東北弁だった。

「いくさは、責任をとれんようになった者どうしが、負けた方に責任はおつ被せるもんよ。下々（しもじも）の者をたぶらかす所業でござろう。それをやめさせようとは…なんとも痛快でござるな！」  
無表情な能面のような顔が割れて、不気味に笑った。あつけに取られた3人は、背後に揺れ動いているイギリス艦隊を振り返った。

―次話！

―第17話伏見高瀬番所 酔屋の高瀬舟に乗り換える為伏見の高瀬番所に降りた4人。そこに何故か新撰組が！身元を尋ねて来た！久利坂と野口で斬り捨てれば幕府のお尋ね者に…星岡と理香子に、  
またもピンチが襲いかかる！



## ―第17話伏見高瀬番所

### ―第17話伏見高瀬番所

天保山からは、野口が用意した舟で伏見まで上った。現在の京都伏見区になる。南浜町に龍馬が定宿にしていた寺田屋がある。さらに戊辰戦争で伏見奉行所は戦場と化すはずだった。日付は12月8日の午後になっている。京では朝議が開かれ、長州藩主父子の入京と官位の回復が決定する。翌日の12月9日は王政復古が宣言されて、徳川慶喜の新政府における地位を巡って、戦争に転げ落ちてゆく。しかし、この世界では坂本龍馬が生きている。彼がどうやるのか…理香子にも分からない。

星岡達は、酢屋の高瀬舟に乗り換える為に、川が3つに分岐している場所に有る高瀬番所で舟を降りた。橋を渡って東に行けば寺田屋が有る。

「ちよつと…寺田屋を見てみたいんですけど？」  
理香子が遠慮がちに言った。星岡は番所の役人を、それとなく顔で示した。

「動かない方が良い。俺達は身元不明だ。役人に出身地を聞かれたらまずいよ。酢屋の人達を待った方が良い」

星岡も寺田屋の事は知っている。幕府の捕り方に踏み込まれた龍馬が、恋人おりょうさんの機転で脱出した宿屋だ。

立っている4人のそばを、武家が通りかかって立ち止まった。反射的に、刀の柄を握った久利坂の右手を、野口が押さえた。

「娘。少々尋ねる。名は何と申す」

理香子は海援隊士の姿だが見抜かれている。身分の差が絶対で有った時代に、即答しなければトラブルになる。

「はい。理香子と申します」

娘と呼ばれたら、正直に娘として対応せざるおえない。

「やはり娘か…」

全員に緊張が走った。それを察した武家の方が慌てた。

「あついや…咎め立てるわけではない。せつしやは、伏見奉行所に勤める遠藤善工門と申す。国に残してきた娘に、あまりに似ておるゆえ懐かしさに見入ってしまったまで。許されよ」

武家は目礼して、素早く立ち去った。

「何か似てるな顔が…理香子と名字が同じだし…」

星岡に言われた理香子は…涙ぐんでいた。

「ひいおじいちゃん。遠藤善工門は伏見奉行所に役目で出張中に、鳥羽伏見の戦いが起こり…明治元年1月3日奉行所内に着弾した砲弾の直撃を受けて即死した」

理香子は遠藤善工門が去った方向をジッと見つめている。その理香子に星岡は言った。

「この世界じゃ…鳥羽伏見の戦いは起こらない。大丈夫…大丈夫だ」

しばらく待って、酢屋の高瀬舟が来た。寄せて来た舟の船頭が声を掛けてくる。

「星岡さん、遠藤さん、久利坂さん。こちらに…急いで…」

最後は小声になって、顔がこわばっている。星岡を見ると、時代劇でお馴染みの、浅葱色にギザギザの白い袖の3人が近づいてくる。

「新撰組がなんで伏見に？」

「その方ら？。どこにゆく？」

船頭が答えた。

「京に上ります」

「エゲレス人が京に忍び込もうとしておる。見なかったか？」

「いえ。見ておりません」

新撰組の隊長格の男は、星岡と理香子、野口と久利坂をジロジロと見た。プレッシャーを掛けているのだが、4人とも動じない。男は挑発に出た。

「お主ら。何者だ？。よからぬ浪士か？」

新撰組は、3人一組でフォーメーションを組んで、志士達を一太刀づつ斬り刻んだ。彼らにとつて、浪士を斬る事は任務で有つて合法だった。だからためらいが無い。野口と久利坂なら、この3人を斬り捨てる事は出来る。しかし、そうすればこの時代の警察組織に、お尋ね者として追われる事になる。それしか無いのか？。星岡も久利坂も追い詰められた。その時、理香子がイチかバチかの賭けに出た。

顔を伏せたまま言った。

「わたくしは、伏見奉行所に役目にて勤めております遠藤善工門の娘にて清きよにございます。訳有つて、許嫁いいなすけと家来ともども、尾張中村より父を訪ねてまいりました。京は河原町の酔屋が知り合いでございまして、これより酔屋に上る所にございます。ご不審有れば、奉行所にお問い合わせ下さい」

この当時、女性の旅は襲われる確率が高い。男装するのは、おかしな事ではない。

男は理香子を見て、目を細めた。

「…島田。確かめてこい」

右に居た男が、ハッと行って去った。

「…清か。いい女だ。覚えておこう。私は新撰組6番隊長井上源三郎だ。我らも明日は京に帰る。一度、壬生みぶの屯所とんじょに訪ねて来い」  
「失礼な…抱かれに来说っている。理香子は顔を上げて、にらみつけてやりたい衝動を押さえた。この男には無礼打ちなる死刑執行権が有る。」

「わたくし。この星岡様と夫婦つごの契りを交わしておりますれば、お許しを頂きますよう御願ひ申します。」

井上は、からかうように星岡を見た。

「分かりきった上で申しておるのが判らぬか？。このような良きおなご、競う相手の一人や二人…おるのが当たり前だ」

星岡は、さすがに頭に來た。顔を上げて、井上と視線を合わせた。

「…なるほど。良い目をしている。しかしこの目は、夢ばかりを追う輩やからの目だ。夢では喰えぬぞ星岡殿？」

星岡は完全に相手が新撰組である事など吹き飛んでいた。

「夢を追う馬鹿がいなきや、良い世の中なんて来ねえよ！。あなただって、夢を追ってるだろ？。だから、そのギザギザ着てるんじゃないのか？」

理香子は「せつかく上手く行つたのに…ダメだ」

と覚悟した。刀の鯉口が切られる音を待った。

しかし、代わりに大きな笑い声が降って來た。

「おもしろい。星岡殿はかぶき者でござるな。確かに、良き世はそう言う馬鹿が呼び寄せる。坂本龍馬など、その馬鹿の筆頭ひつとうだ。それを斬れと言われるのは皮肉な話よ…」

そこに、伏見奉行所に行っていた島田が戻って來た。

「井上さん。遠藤本人に確かめました所、間違い有りません」

井上の目からは鋭さが消えていた。

「当然だな。行って良い」

井上は後ろ向きになって、振り返らずに続けた。

「星岡殿。清どのは諦めませぬからな…」

井上はそう言って笑うと、部下をうながして去った。

高瀬舟が動き出すと、星岡はため息をついた。

「駄目かと思った。見事に挑発された。済まない。善工門さんに救われた」

久利坂は星岡の肩を叩いた後、理香子に言った。

「善工門さんが娘だと…言ってくれると、何故確信したんです？」  
理香子は少し笑って見せた。

「父もおじいちゃんも、ああいう人でした。だから、ひいおじいちゃんもきつと、そうだろうと思っただんです」

「なるほど。遠藤家のDNAに救われましたか。」

久利坂は楽しんでいるように見えた。それを星岡は恨めしげに見た。

「久利坂さんは、楽しそうですね。俺はそんな風になれません」

久利坂はウン？と眉毛を上げて見せた。

「新撰組6番隊隊長の井上源三郎に、伍長の島田 魁。本物に会えるなんて、ラッキーでしょう。時代劇でも、この2人はなかなか出て来ない」

「殺人マシーンですよ！。新撰組は…」

「まだ徳川幕府が政府で、尊皇攘夷の志士達は反政府分子で、言わばテロリストです。正義はまだ新撰組側に有る。彼らを一方的に殺人組織と呼ぶのは、酷でしょう。幕府が間違った事を彼らはまだ知らない。どうです？。遠藤さん？」

理香子は南に遠ざかってゆく伏見の方を見ていた。

「久利坂さんの言う通り、彼らは何も知らずに、幕府の募集した浪士隊に参加して、新撰組を組織した。志士達は反政府テロリストでした。2009年の警察だって、銃を持ち発砲もする。久利坂さんのような人達も、やもおえない場合には射殺する。近藤勇は、坂本龍馬の暗殺を疑われて、戊辰戦争の時に晒し首にされた。関係して

なかつたのに……。新撰組だけが間違つた訳じゃない」

「一応、公安は射殺しない事になってます。威嚇射撃するだけです。この時代、刀を振りかざすだけでは参つてくれませんか、そういう事情でしょう」

星岡は高瀬舟の縁を軽く叩いた。

「正義って何だろう……。でも殺す事はない。きれい事かもしれないけど」

またも野口が締めくくつた。

「きれい事を並べられるような、強い者は居ますまい。弱い者が、飛び道具なんて言う……。卑怯者の武器で戦う。外国から来た卑怯者どもで、この有り様でしょう」

高瀬舟は、京の七条に近付きつつあった。

―次話！

―第18話 王政復古 坂本龍馬が生きている状況で王政復古のクーデターが始まった！。後藤象二郎を使って、龍馬の無血革命の戦いが始まる！。

## ―第18話 王政復古

### ―第18話 王政復古

星岡達は、無事酢屋に戻った。

日付は12月9日の朝になっている。龍馬は酢屋に居た。何故かと言え、全てを知っている遠藤理香子が居るからだ。

階下や材木置場には、高台寺党と西郷が残っていた20名の薩摩兵が固めている。西郷本人は、御所の裏門を守り、他藩の軍勢の入門を禁じる薩摩兵の指揮に当たっている。

「遠藤さん。史実では、朝議はどうなつちよりますか？」

「史実によれば…12月8日の昨日、毛利親子の官位復旧 入京許可と、久我 岩倉具視などの出仕差し止めが赦免になります。会議は徹夜で続いて、9日今日の8時過ぎに終わります。ちょうど今です…」

理香子は腕時計を見た。

「二条撰政などの退出を見届けてから、岩倉具視が幕府廃止、撰政関白廃止を上奏。決定されます。赦免してくれた二条撰政を、岩倉具視は首にした訳です。中川宮、二条以下高官の参内は即刻差し止め…つまり追放ですね。このだまし討ちがクーデターと呼ばれる理由です。この後、小御所で新政府設立の会議が開かれます」

星岡は政争の残酷さに、気分が悪くなって、窓際に移動した。理香子の話は続く…。

「会議は、山内容堂公の將軍慶喜を呼ぶべきだ。慶喜不在で彼を断罪するとは何事かの抗議で紛糾します。議長の中山忠能が休憩を宣言。休憩後再開されると、大久保利通が後藤象二郎を議論で押しまくり、不利と見た後藤の進言で山内公も反論を引つ込めます。そして、慶喜の將軍辞職。内大臣を辞し領地を返上する事を求める事が決定されます」

星岡は窓際から言った。

「それが今、進行中って事か？」

今度は龍馬がニヤリと笑った。

「星岡さん。この成り行きは後藤に聞かせて有ります。小御所会議は紛糾せんぜよ！」

今度はアメンティティが言った。

「でも。紛糾してもしなくても、決定事項に変わりはないんじゃない？」

「雨谷さん。違うぜよ。新政府が外国に王政復古を布告する時…同じ反論が出て、慶喜を前内大臣議定として朝議に参加させる事になる。参加する為に將軍が京に上る。当然幕府軍も一緒に動く。だから戦になる。小御所会議で山内公を後藤が黙らせられれば、この反論自体が無くなる。そうなれば、成功じゃきに。あつちよりますか？理香子さん？」

「素晴らしい。Aプラスを差し上げます」

星岡が得意げな龍馬に質問した。

「失敗したら？」

「後藤を説教せにやならん」

龍馬はそう言つて笑った。理香子は部屋に置かれた火鉢に手をかざした。横にはアメンティティとミリティ姉さんが居る。久利坂は寒くないのか、星岡よりも格子窓にくっ付いて外を眺めている。

理香子は龍馬の有名な話を確認しようと思つた。

「…龍馬さん。新政府の役職の人選。下書きは龍馬さんだと言われていますが？」

「わしじゃ」

久利坂が興味深げに顔を向けた。

「それを、西郷さんに見せたら、おはんの名前が無いと言われたのは？」

「そばで聞いてちよつたようじゃ」

龍馬は楽しんでいる。

「そして。何をやるのかと聞かれて、世界の海援隊をやると言った？」

「言った。エゲレス フランス メリケン。こん中で新政府がやってゆくには、今までよりも国を富ませ兵を強くせにやらん。逆に強くなれば、戦で物事を解決したくなる。国を強くする一方、戦争の勃発も防がにやらん。新政府こそ海援隊が必要ぜよ！」

理香子は龍馬の丸い顔を見た。身分差別の無い世界を純粹に求める顔を。

「龍馬さん。それは命を常に危険にさらす仕事です。死なないで下さいね。きつとこの先は、私の知ってる歴史からは離れてゆきます。助言できなくなると思います」

「ここまで助けてもらえれば充分ぜよ。」

龍馬は。正座に座り直すと、深々と頭を下げた。

全員がその姿に、胸を打たれた。

その日、一同は後藤象二郎の帰りを待った。

夕暮れ時に、後藤象二郎はやって来た。

後藤が酔屋の2階で語ったのは、ほぼ理香子の言った通りだった。しかし。

山内容堂公が黙っていた分だけ議事は進行してしまった。

「…外国政府に王政復古を布告するに当たって、我が殿は署名捺印を拒否されました。大阪に移動を始めている幕軍が様子見で停止したらしい。伏見か鳥羽あたりと聞いた。入れ替わりで京に入ろうと

している薩摩軍と接触するぞ。このまま幕軍が止まっちゃうと……」  
理香子が青ざめ、久利坂は鋭い目で後藤を見た。

「…史実では、12月24日に朝議で將軍慶喜を前内大臣に復帰させ、領地返上も棚上げになった。でも今日、王政復古の布告が拒否されたとしたら…12月10日の明日にも、棚上げが決定される。そうだったら…」

久利坂は理香子を見た。理香子が後を続けた。

「…幕府軍はあさつてにも、京に向かって北上するかもしれない。そうなったら、北上して来た薩摩軍と京市街で戦闘になる」

理香子の震える声が、静まり返った部屋の中に響いた。

龍馬がスクツと立ち上がった。同時に久利坂も刀を引き寄せて立った。

「どうするんです？」

アメンテイテイが声をしぼり出した。

「二条城ぜよ！。大目付の永井に会う。今夜中にも、將軍を脱出させる！」

星岡が驚いて言った。

「あなたは死んでるんです。今、京の町に出たら、武力倒幕派に斬り刻まれますよ！」

そこに、階段の上がり口で人影が見えた。

「野口富蔵？」

理香子が言った。

野口は、上がり口から静かに2階に上がって来て、部屋の入り口に座った。野口は龍馬を才谷と変名で呼んでいる。

「才谷殿。土佐の武力倒幕派の面々には、才谷殿と中岡殿がここにおられる事は洩れたようござる。薩摩の武力倒幕派が嗅ぎつけたと、西郷殿から主人サトウに言つてがござった。店の前の舟入に居る薩摩兵は味方でござれば、小路に入つて来れませぬが…すでに土佐薩摩合わせて50が集まっております」

部屋中が色めき立った。刀をつかんで立ち上がる海援隊士も居る。

龍馬が一同を制した。

「吠<sup>ほ</sup>たえな！。土佐藩同士も、薩摩と斬りあうも許さん！」

しかし

と云う声が上がったが、全員が座り直した。

「後藤さん」

龍馬が静かに言った。

「何か？。龍馬？」気の小さい後藤はのけぞった。

「後藤さんが、二条城に行ってもらえますか？」

「…なあに？。わしがか？」

土佐藩内では、八方美人で優柔不断の人物として知られていたが、言わゆる出たがりの素人役者的な部分がある。脚本さえしつかりしていれば、どんな大芝居でも打てる人物だ。

「しかし龍馬。二条城から脱出させたとして、どこに逃がす？」

「大阪天保山に向かうよう言って下さい」

理香子が異議を唱えた。

「パークスとイギリス艦隊に阻止されますよ？」

「メリケンのファンケルバーグ公使の約束をとりつけちよります。

メリケンは何事が起ころうとも、徳川<sup>たくん</sup>慶喜大君の安全を保証すると」

「だって。軍艦イロクオスも含めて、アメリカ艦隊は大阪湾には居ないんですよ！」

龍馬は理香子の深刻な顔を笑って見せた。

「理香子さん。発音が間違っちよります。アメリカ艦隊じゃなくて、

メリケン艦隊じゃ」

「今そんなの…」

龍馬は理香子をさえぎった。

「まあ聞いてつかわさい。メリケンと云う国が約束したと云う事は、軍艦が居なければ居ない方法でやってくれます。出来ないのなら、ファンケルバーグは約束する人物ではない」

部屋は静まっている。龍馬はボーとしている後藤を見た。

「後藤さん。今すぐ二条城に行ってもらえますか？」

「わあわかった」

立ち上がって階段を駆け降りて行った。

「後は星岡さん達を、帰さにやらん」

理香子が言った。

「將軍が脱出するまで、見届けさせて下さい」

「將軍が船に乗れば、舞台は江戸になる。わしらも江戸に移らねばならん。星岡さん達は高台寺から離れる訳にはいかん。連れて行けんぜよ。のう？星岡さん」

「でも小路の両側に武力倒幕派が集まっていますよ！」

龍馬はまた笑った。

「あの連中は単純じゃきに、わしと中岡が飛び出せばどこまでもついて来よる。高台寺党の伊東に案内させるきに、心配いらんぜよ」  
「手はずを整える為に、伊東甲子太郎や薩摩兵が呼ばれて、段取りが整えられた。」

酢屋の前に全員が出た。日が暮れて、町には明かりに灯火が入っている。  
段取りはこうだ。

まず再び増派を頼んだ薩摩兵50人が25人に分かれて、河原町高瀬川両面に飛び出す。その後ろを、龍馬中岡は海援隊士と共に、河原町側に飛び出す。高台寺党20名と星岡達は、高瀬川側に出る。龍馬達は大阪天保山を目指し、星岡達は高台寺を目指す。アメンテイの腕時計型コンピューターは、バッテリー完全復旧してナビゲーション完璧だ。さらに、野口がついてくれるし久利坂もいる。

両者は別れを惜しんだ。

「…理香子さん。泣く事はない。後の事は、帰ってから文献を読めばわかるきに。戦は坂本龍馬がことごとく止めたとなっちよります」

理香子はその言葉に笑って見せた。

「龍馬さん。手紙を残しておいて下さい。必ず探し出して読みますから」

「手紙か！。乙女姉さん宛てに、同封しちよきます。確か、わしの手紙は全部残っちゃりましたな？」

龍馬は2009年の事を、思い出したようだった。

「…あの時代は、面白かった。宮本さんに、よう言うちよって下さい。競馬にボーリング、打ちっぱなしゴルフ。カラオケ。クラブにゲーバーにヘルス。パチンコは楽しかったと！」

星岡は目を手で押さえ、理香子は目を丸くし、久利坂は笑い出した。「久利坂さん！。あんたの部下は、坂本龍馬に何させるんです！」

ホームレスのはずですよ！」

久利坂は悪いと思ったのか、笑うのはやめたが顔は笑っている。

「幕末に生きた人達の努力の末に、2009年が有るんです。それくらいの楽しみを得る資格は有るでしょう」

そう言われると、星岡も理香子も認めざるおえなかった。

―次話！

―第19話井上源三郎 高台寺党に守られて、高台寺にたどりついた星岡達を待っていたのは？。最高にメンドクサイあの男だった！

## ―第19話井上源三郎

―第19話井上源三郎

「では。いくぜよ…」

龍馬はスミス アンド ウェッソン1/2ピストルを真上に向けた。  
―パンツ

乾いた音がして、酔屋の前から人垣が別れた。店の戸は閉められ、  
2階から嘉兵衛や千代ら酔屋の人々が、無事を祈って見ていた。

小路の両側で様子をうかがっていた武力倒幕派は、まず薩摩兵に蹴  
散らされた。慌てふためいている目の前を、坂本龍馬と中岡慎太郎  
が駆け抜けてゆく。

「居たぞ」

叫び声を上げながら、河原町本通りを追いかけ始める。

星岡達は高瀬川側を、高台寺党に守られながら四条大橋に向かって  
走ってゆく。高瀬川沿いは、町家の軒に灯りが入って、暗闇ではな  
い。

もう龍馬がどうなったか、知る事は出来ない。果たして、將軍慶喜  
は脱出できるのか…龍馬は本当に江戸に行くのか？。―高台寺にた  
どりつく事だけを考えるしかない

星岡は割り切った。先頭を走る伊東甲子太郎は、高台寺に隣接する  
月真寺を本拠地にしていて、道を間違える事はない。星岡はフォー  
クシンガーとして、ランニングを欠かさないが、理香子は息が切れ  
始めていた。宇宙人達は、テクノロジーに囲まれているはずが、ま  
ったく息が切れてない。

ついに、四条大橋から建仁寺を回り込んだあたりで、理香子は止まった。

「ちょっと待って。ごめんなさい」

理香子は建仁寺の土塀に手をつけて、息を弾ませる。

追っ手は迫って来る。高台寺党が横に広がって、刀を抜いた。

「理香子！乗れ！」

星岡がしゃがんで、背中を見せた。ミリテイ姉さんが、理香子を引っ張って、背中に乗せる。その背中から理香子は言った。

「帰ったら…毎日ジョギングするよ」

「んじゃあ…俺はだなくこんな事は2度と起こらない事を、毎日祈らせてもらう！」

星岡はウンザリした声で言った。アメンティティは、マズイと云う顔で星岡をチラリと見た。

一行は台所坂から、高台寺に入った。そのまま墓地に向かう。高台寺党が門を閉じて、武力倒幕派を阻止してくれている。

伊東甲子太郎が、提灯に火を入れた。それをアメンティティが受け取って、前回の記憶を頼りに石塔を捜した。

木立がまばらに立つ、古い墓石の間をアメンティティは進んで行く…。

「確かあこの辺のはず」

提灯を高く掲げた。そこに…

誰かが腕を組んで、座っていた。

浅葱色あさぎいろの羽織り…袖が白いギザギザ。

「伊東。何の真似だ？」

低い声が響いた。アメンティティを後ろに引っ張って、野口と久利

坂が前に出た。

「いつ井上源三郎！」

うめいた伊東は、元新撰組の隊士だった。史実では、坂本龍馬に暗殺者が狙っているので気をつけよと忠告した数日後、自らも斬られてしまう。この世界での彼の運命は、まだ定まっていない。

「伊東。こんな大勢で、こんな夜に、墓場で何をするつもりだ。肝試しには寒すぎる…聞かせてもらおうか？」

新撰組6番隊が、井上の周りに湧き出して来た。後ろからガン灯をかざして、星岡達を照らし出した。

「…ここで坂本龍馬が消えたそう。そして酢屋にまた現れた。その異人の顔を持つ二人…さては妖怪か！。伊東きさま、魔神に魂を売り渡したか？」

井上は、刀の鯉口をカチリと切った。周りの新撰組も、それにならって鯉口を切る。もはや、ちよつとしたキツカケで斬り合いになる。咳ひとつ出せない。

井上が立ち上がった。そして、理香子を見つけた。

「うんっ？。清殿か？。皆、待て」

井上は刀の鯉口を戻した。

「！。隊長。どうされました？」

伍長の島田魁が慌てた。

「知り合いが居る。…清殿。ここで何をしておられる？」

理香子は前に進み出た。久利坂が止めようとした。

「久利坂さん…大丈夫です」

鋭い目で、井上の前に出た。

「井上さま。この2人は、妖怪などではございません」

「ふむ。では何者だと言われる？」

「私達は幕府と薩長の戦を止める為、140年先の時代から参った者でございます」

「何と？140年先の時代。しかし、遠藤善工門は娘と…」

「わたくしの祖先でございます。遠藤家の血筋は、人を救う為なら

ウソもいとわぬ血筋にございます。お許し下さい」

「うん。にわか信じ難い」

理香子は記憶を頼りにたたみかけた。間違えなければいいが…と思  
いながら。

「文政12年3月1日生まれ。八王子千人同心世話役 井上藤左衛  
門の三男。呼び名は源さん。真面目で誠実な性格で、若い新撰組隊  
士に信頼が厚かった。文久2年に浪士隊に参加。芹沢鴨の肅清後は、  
副長助勤。池田屋の手入れで、土方隊の支隊を指揮。鳥羽伏見の戦  
場で、腹部に銃弾を受け死亡。…140年後の井上さまの記録です」  
「産まれた日付も父の仕事を知っている者も、三男である事も知っ  
ている者はおらん。まこと、140年先から来られたか…」  
新撰組の隊士も余りの詳しさに、ざわつき始めた。

「静かにせよ。」

ざわつきは止んだ。

「ここで何をされる？。清殿」

「140年先に帰ります。井上さまの後ろの石塔を使って」

井上は首を回して、鷲の彫刻を見た。

「この鷲の石塔か…」

「そうでございます」

理香子は、源さんの人柄に全てを賭けていた。自分の解釈が正しけ  
れば、その通りの性格ならば、井上源三郎は刀を抜かないはず。し  
かし、源さんは、理香子の解釈とは別に…惚れた女に甘い人物だっ  
た。

「願いがあある」

理香子は意外な展開に戸惑った。

「何でございますよう？」

「拙者。恥ずかしながら、清殿に惚れ申した。妻として迎えたい。  
交換条件として、他の者はお歸し申そう。清殿は残ってもらいたい」  
相変わらずのストレート真っ向勝負だ。

「お断り申し上げるならば、刃傷にんきゆうに及ばれますか？」

「清殿を、ただあきらめる訳には行き申さん。星岡殿への忠義でござれば、刀を抜くしかござらん」

「星岡さまを斬ると仰せられますか？」

「如何にも」

「ならば」

理香子は、久利坂の小刀を腰から抜いた。正座すると、切っ先をのどに当てた。「何を！」

井上と星岡が同時に叫んだ。

「星岡さまをお斬りになるなら。わたくしも、のどを突いて果てます。どうぞお斬り下さい！」

井上は狼狽した。

「待て！待たれよ。死んではならん！」

「では、皆帰らせていただけますか？」

井上は困り果ててみえた。

「わかり申した…井上源三郎の負けでござる。それ程までに、想っておられるとは…」

その後の言葉は予測出来なかった。

「…せめて、清殿が身につけておられる物を何か頂けぬか？」

井上は好人物だった。さすがにかわいそうに見えてきた。理香子は、美術館の予備のIDカードを懐から出した。

「これで、いかがでしょう？」

ストラップがついて、顔写真に名前IDナンバーが入っている。これなら納得のはずだ。

「おお。清殿のいみ名は理香子と申されるか！。写真も色がついておる」

井上は、しばらく涙ぐんでIDカードを眺めていた。星岡は「なんじゃこいつは？」と訳が分からなくなっていた。

「よし！」

井上は突然叫んで、石塔の前から動いた。

「皆も場所を開けよ！」

新撰組6番隊は、困惑しながら…どうなってんだと言いながら、石塔の前を開けた。井上は完全に自分の世界に入ったようだ。

「清殿。井上は忘れませぬ。清殿も覚えていてくだされ」

言っている横で、アメンティティは「井上の気が変わらない事を祈りながら」水晶を鷲の目に入れた。

野口を除く5人が、石塔の周りに現れた青い光の中に入った。

星岡はビュンと飛ぶ感覚の後、暗闇に包まれた。

「次話！」

「第20話ロサンゼルス広場再び」

2009年に帰還した星岡に理香子。坂本龍馬が生きている事で、歴史も日本も大きく変化していた。歴史を変えて良かったのか…悩む星岡を待っていた物は！

## ―第20話ロサンゼルス広場再び

―第20話ロサンゼルス広場再び

深い漆黒の闇が、数秒で開いた。

久屋大通公園ロサンゼルス広場の見慣れた階段に、木々が見える。

白根刑事部長が、疲れ果てたように生け垣のブロックに腰掛けていた。星岡達に気がついて、立ち上がった。なぜか眉をひそめた。

「星岡さん。久利坂さんは？」

白根に言われて、まわりを見渡した。理香子にアメンティティ…ミ  
リティ姉さん。久利坂の姿が無い。

「久利坂さんなら…」

アメンティティが答えた。

「…飛ぶ寸前に、外に飛び出しました」

「なんで？」

「さあ…何か有ったんでしよう。大人の事情が。」

―訳が分からないと思いつつながら―星岡はアメンティティから白根に視線を移した。

「こっちは、収まったんですか？」

「まあなんとかね」

「我々に危険は？」

「有りません。どうやら歴史が改変されたようです」

「…ようですってのは？」

白根は記憶を探るような表情をした。

「私は、外国の諜報機関を相手にする仕事をしてます。そのために、日本史世界史は頭に叩き込んで有ります。その記憶が変わってゆくのが判ります。まず…坂本龍馬の暗殺は無くなりました。佐賀の乱も…西南戦争も未然に防がれました。大久保利通も伊藤博文も暗殺されません。そして…」

白根の顔に驚きが広がった。

「そして？」

「日清戦争が消えました。日露戦争も…一次大戦、二次大戦も…」  
理香子が思わず聞いた。

「待って？。じゃあ…世界はどうなったの？」

白根は眉間にシワを寄せた。

「…日本は。中国 朝鮮 ロシア モンゴルで、東アジア経済圏を設立。その主導権を握りつつ…アメリカ イギリスと冷戦の真つただ中です。東南アジアでは、代理戦争が勃発しています」

星岡は理香子を見た。

「それは。俺達の知ってる日本よりは、ましな日本になったのか？」

「わからない。でも。日本はきつと、世界一の軍事力を持つてる事だけは確かだね」

2人は、頭を整理する必要を感じた。白根の記憶は、改変されたようだ。星岡と理香子の記憶は変わっていないからだ。その2人は別に、宇宙人達は平然として見えた。

「ホシオカさん。リカコさん。私達は戻ります。ホテイオテイが心配してますので」

考え込んでいる2人に、アメンティティが言った。こう星岡は聞くしかなかった。

「アメン…。戊辰戦争を止めるだけで夢中だったけど、これで良かったと思うか？」

アメンティティは迷う事なく答えた。

「4つの戦争が消えた。その何に不満が有るんです？。アメリカの正義の戦いなんて、必要ないんですよ。一般市民には。必要としているのは国家と言う名の組織だけです。それも、命を削ってでも戦わない努力をしないせいで。消えた4つの戦争の裏ではきつと、龍馬さんと海援隊の人達：その意志を継いだ人達の、命を削る努力が有ったと思いますよ」

「でも。歴史が変わってしまった」  
「アメンティティはニッコリ笑った。」

「大国の謀略と、反抗するテロリストが殺し合ってる歴史に：僕は何の未練も感じませんね。それより、龍馬さんの理念が受け継がれている世界にまだ救いを感じます」  
「言っている事は分かる。しかし、星岡は釈然としなかった。」

「それでも、変わった歴史の中で、運命を変えられた人がいると俺は思う」

「それは解ります。でも運命を変えられた人々にも、この歴史はベストだと僕は胸を張れます。だから僕は、坂本龍馬を暗殺させまいとしました。歴史を改変した責任は、このアメンティティ アーメンに有ります。すべての責めは僕が負います。その審判は、コロニアの市民法廷で下されるでしょう」

「審判って？。罰せられるかもしれないのか？」

「勝算は有ります。死刑になる覚悟も」

「おまえ？。気分と思いつきみたいに見えたけど：最初から命賭けてたのか！」

星岡は目頭が熱くなるのを感じた。

「確かに助けられた相手が、坂本龍馬だと分かったの思いつきですけど：。しかし涙が似合わないですね、泣かないで下さい。大丈夫ですから」

「駄目だ！。俺達だって一緒にやったんだ。俺達も行くよ。アメンは間違っていない。必ず俺達が無罪にする！」

「ありがとうございます。でも地球人をコロニーに連れて行ったら、

そつちの罪で死刑になります。ガマンして下さい」

「だけど…」

ミリテイ姉さんが星岡の手を握った。

「心配しないで。知り合いに腕利きの弁護士がいるの」

星岡は、この宇宙人達に不可能と限界が無い事を思い出した。

「わかった。でも、結果は必ず知らせて下さい。もし有罪になったら助けに行きます」

ミリテイ姉さんはアメンテイテイと顔を見合わせた。アメンテイテイは、星岡の物まねで言った。

「んな事は無い事を願ってるよ。でも、その時は頼む！」

星岡とアメンテイテイは抱き合って、肩を打たき有った。

「それじゃあ。リカコさんも元気で！」

理香子もアメンテイテイを抱きしめた。

「ホテイオテイによるしくね。赤ちゃんが産まれたら会いに来てね」  
「もちろん！」

アメンテイテイとミリテイ姉さんは、青い光と共に、名古屋の空に消えていった。彼らのゴタゴタは、まだ続いてゆくようだ。きつと、また呼ばれる日は、そう遠くない。…あきらめ顔で星岡は空を見上げていた。

―次話！ 完結

―第21話エピソードに続く！

## ―第21話エピソード―

### ―第21話エピソード―

アメンティティとミリティ姉さんを見送った後、星岡と理香子はネットカフェに飛び込んで、日本史を検索してみた。ネットカフェに行く路上には、昭和のフィルムで見た軍服の男達と何人もすれ違った。

検索した日本史は、ほぼ白根刑事の言った通りの展開になっていた。坂本龍馬は、三菱を世界最大の商社に育て上げていた。50才で突如、岩崎弥太郎に会社を譲ると、再び海援隊を組織して世界的なボランティア活動を始める。かたわらには、妻と言うよりは右腕として、おりょうさんが居たようだ。75才まで生き、高知の坂本家の墓地に葬られた。彼の銅像が、上野の西郷さんの隣に立っている画像には、星岡も理香子も驚きを隠せなかった。

ネットカフェを出た後、理香子は世界が変わっているのが恐くて、星岡にアパートまで一緒に来てもらった。アパートの階段を登る。

「ユキヒロ。もしかしたら、ユキヒロに軍隊の召集令状とか来てるかも……」

「志願制になつてる事を祈っとくよ」

2人は理香子の部屋のドアの前まで来た。郵便受けに、何かが半分差し込んである。

「何だろ？」

理香子は、中に四角い物が入った封筒を抜いた。宛先は遠藤理香子になっている。差出人は……

「坂本龍一郎か……」封を切つてのぞくと、包みが2つ入っていた。

部屋のテーブルの上に、中身を出してみた。しっかりと梱包された包みを開けると、携帯電話が出てきた。もう一つも携帯電話だった。2つ折りを開けると、電源が切れている。電源ボタンを押したが入らない。

「多分、私の充電器が使えらと思う」

充電器に繋げると、電源が入った。

画面に、メールの画像が出て来た。

: Message

星岡さん。理香子さん。これを読んでおられると言う事は、無事2009年に戻られた事と思います。また、私の子孫が私の遺言を守ってくれたと言う事です。あの後どうなったかをお知らせします。公的には極秘事項になっており、知る事の出来ない話です。

我々は二条城にたどり着き、大目付の永井を通じて將軍を説得し、大阪に脱出を図りました。

大阪天保山まで来ましたが、そこにはエゲレス兵1000人を擁したヘンリーパークスが待ち受けていました。パークスは將軍に「京に戻られよ」と迫りました。1000人の元込め銃を持ったエゲレス兵を前に、なすすべも有りません。しかしそこに、メリケンのファンケルバーグ公使がただ一人で現れました。將軍とパークスの間に立ち、こう言いました。

「ユナイテッド ステーツ アメリカは、將軍の安全を保証する事を要請され、これを約束した。もしユナイテッド キングダムが將軍の安全を脅かすのなら、この私を撃ち殺してからにせよ」

と。

パークスは怒り狂いながら、エゲレス兵に撤収を命じ、自らもその場を去りました。

將軍の戦艦開陽丸が現れ、我々は江戸に脱しました。

この後は、極秘事項では有りませんので、歴史書をご覧下さい。

もう一つの携帯は、久利坂さんの物です。彼は生涯に渡って、私の護衛を務めてくれました。数え切れない程の修羅場で、私の命を救ってくれました。

星岡さん。理香子さん。ありがとうございます。

才谷梅太郎こと、坂本龍馬

そこで終わっていた。

「そつちは久利坂さんのだつて」

理香子は星岡を見た。星岡は包みを開けて、充電器にセットした。

星岡は笑いながら言った。

「久利坂さんらしい」

・ M e s s a g e

星岡幸広さん。遠藤理香子さん。

私は坂本龍馬を一生守る事に決めました。何も言わず、石塔から抜けた事をお許し下さい。

私はこの時代に生きて幸せです。それがすべてです。

「うつらやましい。この時代に生きて幸せだつて…」

理香子は思わずつぶやいた。星岡にも、なんとなく久利坂の気持ち分かる気がしていた。

星岡は意味もなく、リモコンを押ししてテレビをつけた。

「理香子。こんな風になつて、良かったのかな…」

「アメンティティみたいに割り切れないよね。世界大戦は消えた。でも、東南アジアでは代理戦争…。結局はつじつま合っちゃうのかな…」

そう言う理香子の目がテレビに釘付けになった。

発掘調査が行われているらしい場所でレポーターがしゃべっている。私は今。八王子市上野町本立寺の発掘現場に立っています。新撰組6番隊長 井上源三郎の遺体の調査の為、墓が発掘されましたが、その手に握られていた物を巡って、調査チームがトラブルに見舞われていますー

「まさか！」

星岡と理香子はハモリながらテレビに向かって、身を乗り出した。

ー握られていたのは、このようなIDカードで、ある美術館の学芸員の写真と名前が有ったとの事です。現物及びその内容は公表されていません。しかし、このような物が出土した事で、この発掘自体の信憑性が疑問視され、発掘は中止。発掘チームに参加した考古学者の学位剥奪にまで及ぶと見られていますー

「最後の最後に、源さんやってくれるよ。戊辰戦争が無くなったから戦死しなかつたんだな…故郷に遺体が有るつてのは。…よし、理香子！」

「なに？」

「この考古学者を救いに行くぞ！」

「でもさー！」

「これは俺達の責任だ…アメンテイテイを呼ぶぞ！」

理香子は、人の事になると疲れを知らない星岡の背中をジッと見つめた。

「どうした？」

不思議そうな顔で、星岡は振り返った。

「源さんもユキヒロも似てるね」

「めんどくさい所がか？。そこに惚れてるんだろ？」

「多分ね。ユキヒロは私のどこに惚れてるの？」

星岡はニツコリ笑って言った。

「理香子のめんどくさい所に決まってるだろ？」

「何それ？」

「行くぞ理香子」

「待ちなさいよ。私のどこがめんどくさいのよ…」

星岡はもう靴を履こうとしていた。

いつしか理香子も、他人事に首を突っ込む事が、好きになっている自分に気づいた。2人に平穏な日々は、しばらく訪れそうにもない。

ソングライター ホシオカ 龍馬編 完結

―後書きにつづく―



## ―後書き

### ―後書き

お疲れ様でした。ここまで読んで下さった、あなたに感謝します。史実と云う縛りの中で物語を進行させなければならず、説明の部分で睡魔に襲われませんでしたか？。作者も読み返しをしながら眠くて眠くて…。

また、見た事の無い慶応3年の京を、絵地図を見ながら立体化して描かなければならず、ここでまた説明が…。また王政復古から戊辰戦争にいたる過程も、史実を説明しなければ物語が成立しません。また関係者の思惑がどこに有ったかも説明が必要でした。この思惑って云うのは、色んな説が有って、とにかく参考図書を読みながら構築して行かなければならず、かなりの時間を費やしました。作者は、原文の文献を読めないのです、参考図書に頼るしかありません。司馬遼太郎さんの「竜馬がゆく」を読んだのは高校生の時でした。長い間、この本に書かれている事が幕末の本当の姿だと思っていました。しかし30年が過ぎた今…竜馬がゆくの中で司馬さんが、不明だったり、疑問点やつじつまの合わない部分を、それとなく示唆されている事に気づきました。そして、龍馬関連の図書が坂本龍馬の定説と呼ばれる物に対して、根拠が無いと書いています。本作では、土佐の仲間が龍馬を襲わせましたが、司馬さんも仲間が殺された可能性を所々ではのめかしている事も再発見しました。

京都東山の霊山記念館には、龍馬の額を割つたと伝えられている刀が展示され、近江屋の模型で暗殺の様子が説明されています。司馬さんは、この定説となっていて暗殺の真相を、主題ではないと前置きする事で否定されているようにも読み取れます。要するに、後世の創作なのか？日露戦争の戦意高揚の為の情報操作なのか？私達は幕末を推測するしか無いと言うのが現実のようです。大半が死後30年経って作られた資料に頼るしか無いのが坂本龍馬研究の事実だからです。どう推測するかが、土佐弁と共に作者を苦しめました。

苦しめられたと言えば、龍馬の身長です。172cmと179cmと云う数字を、今年11月になって発見しました。ちなみに、中岡慎太郎は152cmと云う数字が有ります。本作では160cmあるかなしにしています。理由は、江戸時代の男性の平均身長が150cmだと云う事です。平均より20cm以上高いと云うのは、リアリティが無いと判断しました。もし、170cm台なら雲を突く大男のような表現が使われると思うからです。まず京の町に出れば、一目瞭然坂本龍馬と判別できたはずですよ。それだと、京に居られないんじゃないかとも考えました。150cmの人間が10cm差を見上げたら、170くらいに感じると云う事で良いんじゃないかと云う設定です。霊山記念館の坂本龍馬再現像は、160cmくらいに見えました。これも参考としました。要するに、身長もはっきり分かって無いと云う事です。

さて主題は、武力によらない紛争解決とは何か？でした。これは日本憲法にも出てくる言葉です。

答えは、交渉の道具とし軍事力を使う事と作者は考えました。抑止力では有りません。軍事力は抑止力にならないと考えます。ミリタ

リーバランスなど紛争中の当事国には開戦しない理由にはならないと考えます。二次大戦の日本がそれを証明しています。紛争相手国に負けない軍事力を持った上で、交渉する人間が抑止力にならなければなりません。それは自国の軍隊や政府世論に対して、抑止力となつて戦う事を意味します。

坂本龍馬は、とにかく戦争はしないんだと云う人物では有りませんでした。幕府よりも射程の長い最新の銃を買い付け、長州や土佐に供給していた人物です。

その傍ら、戦争の芽を摘んでゆく活動をしていました。龍馬の死後、戊辰戦争で土佐藩が興味深い行動を取っています。攻撃されなければ反撃しないと、陣地から動かなかったのです。土佐藩は龍馬の供給した最新の銃で、おそらく後藤象二郎が龍馬の理念を、戦場で現したとも考えられます。

抑止力はシステムでは無く、人だと云う事を坂本龍馬が理念として持っていたと作者は考えます。

戦わないが、負けない軍事力は持つしかない。そして絶対に開戦しないし開戦させない。坂本龍馬はそういう人物として、本作では描きました。

どういう訳か、来年のNHK大河ドラマとかぶってしまいました。一年かけて、最新の坂本龍馬情報を放送されると思います。読者さんには、NHKで定説の確認が出来ると思います。作者は今年中に投稿を終了させなければならなくなりました。NHKの大河ドラマに勝てるとは思いませんので…。マイナーな題材のはずでしたが、世の中の流れは恐ろしいです。では。次回作でまたお会いします。一応ガンダムマニアのおっさんが主人公の物語を予定しています。

2009年12月9日

武上溪

参考図書

戦争の日本史 18 戊辰戦争 著者保谷 徹 吉川弘文館  
遠い崖―アーネスト サトウ日記抄 3 英国策論 4 慶喜登場 5  
外国交際 6 大政奉還 著者荻原延壽 朝日文庫

岩倉具視―言葉の皮を剥きながら 著者永井路子 文藝春秋

日本の歴史―幕末から明治時代前期 文明国をめざして十三 著者  
牧原憲夫 小学館

図説 坂本龍馬 監修小椋克己 土居春夫  
戎光祥出版

別冊歴史読本 27

坂本龍馬歴史大事典 新人物往来社

武士語でござる 監修八幡和郎 k k ベストセラーズ

竜馬がゆく 1〜8巻 著者司馬遼太郎 文春文庫

シールMAP新選組 監修靈山記念館 木村幸比古

ゼンリン住宅地図 京都府 京都市東山区

新選組隊士名鑑 井上源三郎 (ウェブサイト)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7432i/>

---

ソングライター ホシオカ 龍馬編

2010年10月8日21時49分発行